

511

41



始



81

511-41

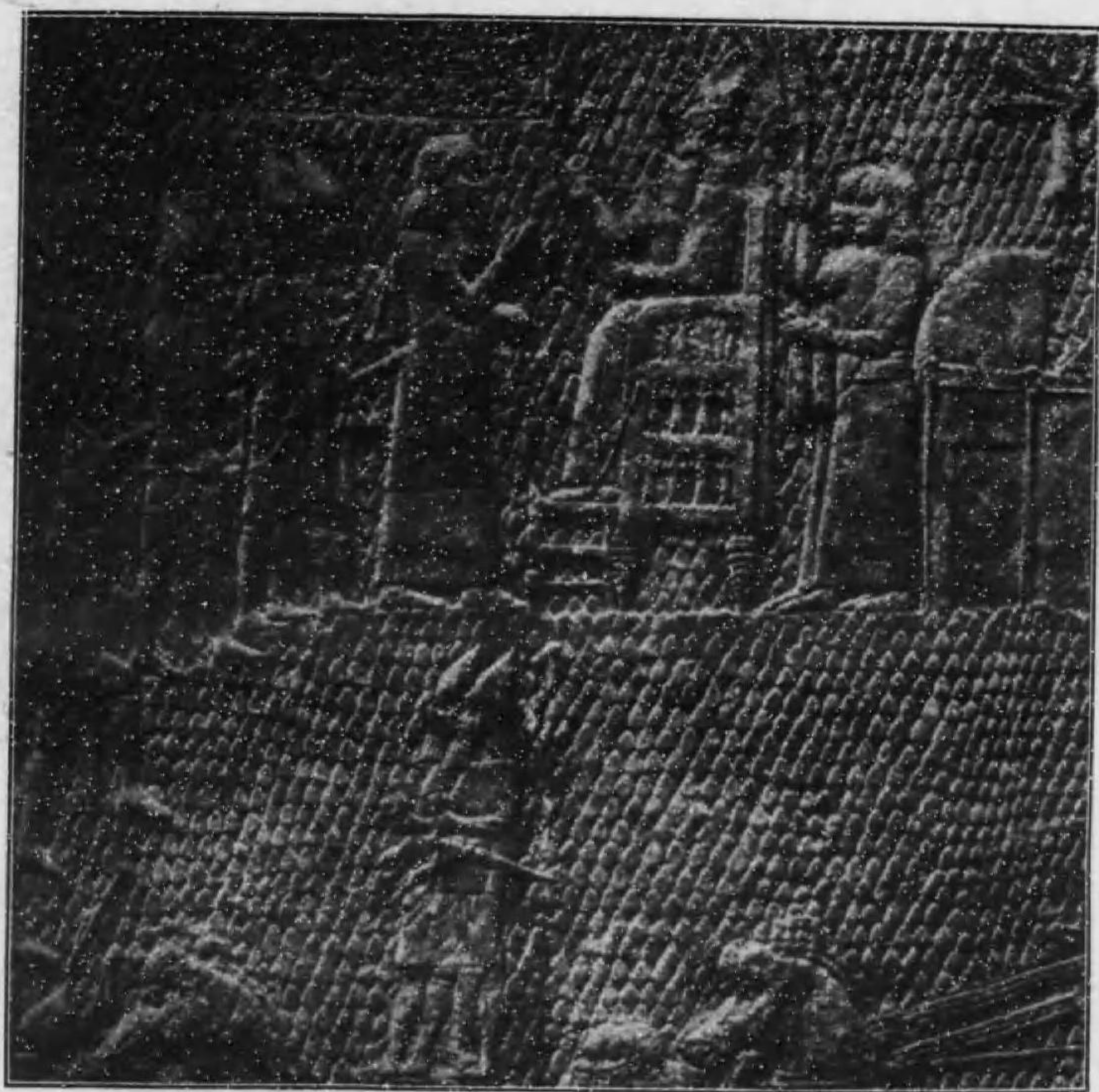


イスラエル
宗教文化史上の
メシヤ思想の變遷

納本

文學博士 石橋智信 著

大正 12.7 4
内交



(照參頁一五二文本) 征西のプリヘンサ
陣のユシキラ

征西のプリヘンサ
陣のユシキラ

征西のプリヘンサ
陣のユシキラ

征西のプリヘンサ
陣のユシキラ



(照参頁〇六五文本) 碑念記捷戦のソドハルサア
(ルアバのロツと一カーハルイテのヤヒオティエは虜捕)
Aus Gressmann - Ranke = Altor. Texte u. Bilder

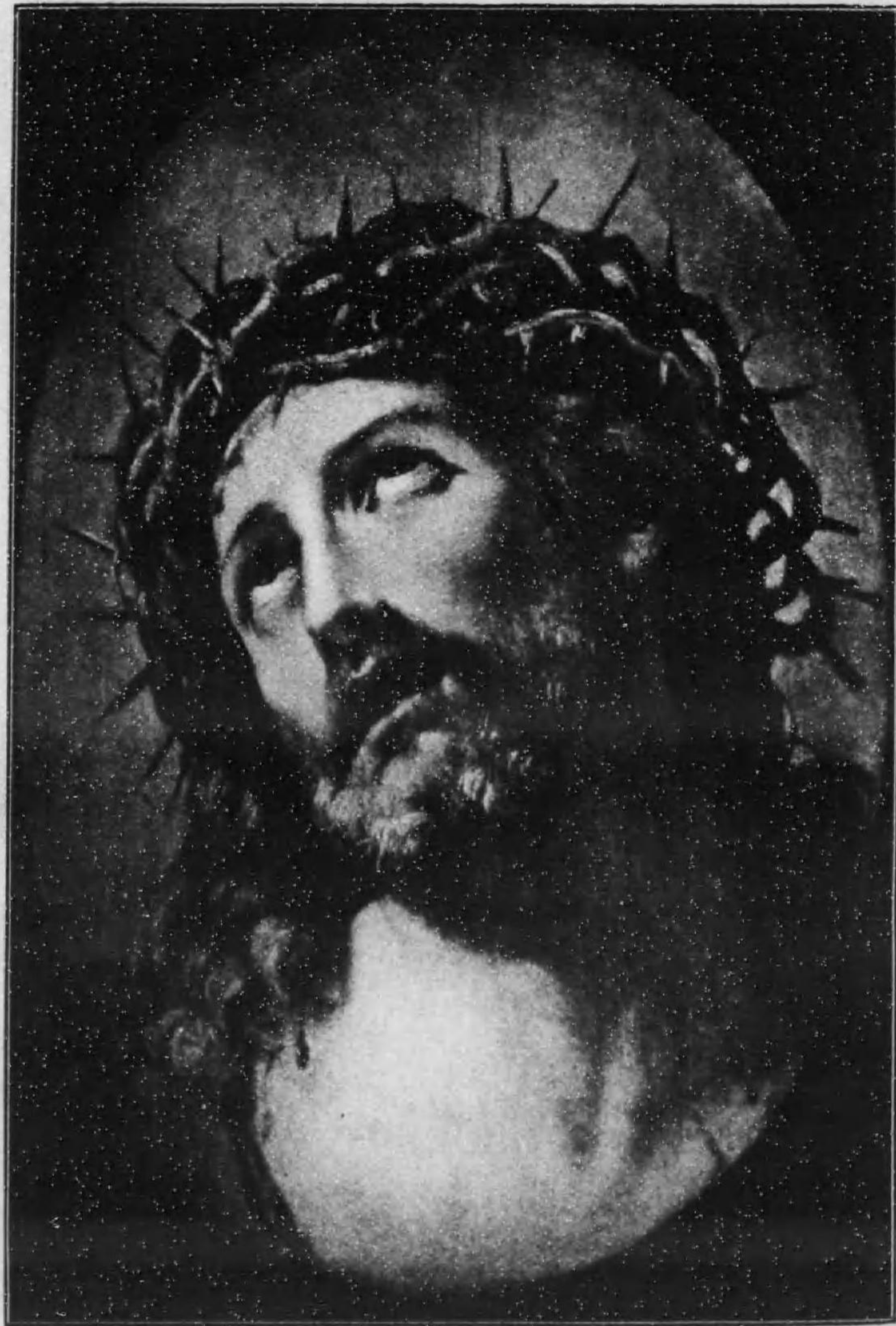


(照参頁三七五文本) ソゴルサ王大のアリシッア
る別を目の虜捕
Aus Jeremias: A. T. im Lichte des Alten Orients.

者 強 の 逸 安



(照参頁三四一文本) 宴酒のルパニバルユーシツア
Aus Gressmann-Ranke: Altor-Texte u. Bilder z. A. T.



アシメの難受

恩師 姊崎正治先生 に獻ぐ

凡 例

一、メシア！ その元來の語義は「膏灌かれしもの」。然し、その意義は、消極的には救世主——禍難と罪障とからの救主 *der Heilende, Heiland*——積極的には授福者 *Heilbringer* である。

一、救ひと福ひ。生存の平安と生の榮え。Heil 誰れか、それを希はぬものがあらう。それは何人にも何より切な念ひではなからうか。生そのものも、結局、この平安と榮え即ち Heil に向つての努力ではありはしまいか。生の努力の直接の發動たる宗教は、その本体を、案外、この Heil の心に胎して居るのではあるまいか。

一、Heil の渴仰たる宗教心とその渴仰を充たす Heiland の信

仰即ちメシアの問題をイスラエルの信仰史に究めんと試みたのが本研究である。

一、古來、メシア問題の研究を試みたものは多い。然し、悉く、研究範圍を所謂「メシア豫言」に限つて居る。彼等はメシア、クリスト出現に就いての豫言的準備をのみ問題として居るのである。舊約書中の言語(豫言)の上の準備をのみ詮議して居るのである。メシア、クリスト出現の思想的準備は更に顧みて居らぬ。この點を如何にかして、一般宗教思想史、否、一般宗教文化史の上からあとづけんと努めたのが即ち本研究である。

一、とは云へ、勿論「メシア豫言」の研究を蔑したわけではない。夫等を一々原典に溯つて究め、原意の存するところを求め、

夫々を試譯し、尙ほ、在來諸家の學説を検討し、それらについての慎重なる批判を得るに力めた。

一、研究の結果たる學位論文をそのまま公刊したのが本書である。

一、本論文審査の勞をとられたる井上哲次郎教授、姉崎正治教授に對し此に甚深の謝意を献げたい。

一、なほ姉崎教授は本書に對して、卷末所載の紹介をもされた。深く謝す。

イスラエルの宗教文化史上の **メシア思想の變遷** (目次)

はしがき……………一—二七

序編 **メシア思想前史**

ヤコブ型の利福思想

最古のヤウイスト(J*)

序説 史料「最古のヤウイスト」に就て……………一—二一

一、獨立小史料J*「最古のヤウイスト」を憶説す……………三—四

—範圍—憶説への理由—年代—

二、内容—試譯……………四—一〇

本論 「最古のヤウイスト(J*)」とメシア思想……………一—二〇

一、「最古のヤウイスト」の利福欲……………一—二二

目次

二、利福追求の物語……………二二—二四

— 神人互角— 神人の争闘— 勝敗— 神は勝てるヤコブ—

三、物語の特異性……………一七

— 人界を超越せずして人と角力とる神— 神を崇めず神と争ふ人

— 福祉欲でなく利福欲 *messianisch* でなく *utianisch*: *Messiah* でなく *Pruthens*

四、ヤコブ型の利福思想……………一四—一七

五、最古ヤウイストの思想動向……………一七—一八

— 利福より福祉へ。ヤコブよりメシアへ—

總説……………一八—二〇

第一編 「過去のメシア」

第一部 ヤウイスト(J)のメシア思想

序……………二三—二四

第一章 ヤウイストの福祉物語……………二五—四〇

第一節 個人の福祉……………二五—二八

第一項 個人の救拯

— A、種の保存— B、復仇— C、脱苦— D、救難— E、保護— F、守護—

第二項 個人への福み

第三項 個人の嚮導

第二節 子孫、一家への福祉……………二八—二九

第一項 福祉の望み

第二項 子福

第三項 子孫繁榮の福祉

第四項 家福まる

第三節 一族、一國への福祉……………三〇—三三

第一項 救

— A、神、罰を與へず— B、脱苦— C、救難— D、嚮導加護— E、聖戰、助け

— F、苦中榮—

第二項 一族、一國への福み

— A、地— B、民—

第三項 福みの確保

要説……………三四—三六

—福祉物語—利福ならぬ福祉—特別な福祉—福祉の理由(無理由無條件)
—神と民との自然的必然的特殊關係を前提として—

第四節 個人への答禍……………三六—三九

第一項 神罰

第二項 Tuzunde

第五節 國家への答禍……………三九—四〇

第一項 エヤブトへの神罰

第二項 自國への試煉

第二章 ヤウイストの受福者物語……………四一—五五

序……………四一—四二

第一節 生誕……………四二—四四

—A、石女の聖誕—B、老女聖誕—C、胎内時の特異—D、出産の時
特異—要約—

第二節 人物……………四四—四五

—全からざる人—美の人—信の人—義の人—

第三節 福まれたる者……………四三—四七

—當然の福みの人—神借なるもの—神の僕—さかゆる者—導
びかれしもの—奇蹟の人—神の福みのみ(人の力に非ず)—要説—

第四節 地を福ひする者……………四七—五一

第一項 他を救うたもの

附説。Jの宗教事情「過去のメシア」の文化程度—

第二項 他人を榮えに導いた物語

附説。「過去のメシア」と「未來のメシア」と(その心、その形)—

總説……………五一—五五

—ヤウイストの物語—福祉の理田—自然的必然的特殊關係—
—福祉のあらはれ—過去のメシア—「過去のメシア」と「未來のメ
シア」と—ヤウイストの心

第三章 ヤウイスト物語中の所謂「メシア豫言」に就いて……………五六—一二

第一 創三ノ……………五六—九五

試譯……………五六—六〇

第一節 創三ノ……………をメシアの豫言と解する學説と

その批評……………六〇—七九

第一、Thomsonの學説とその批評

第二節 Bohl の學說とその批評

第三節 Diller の學說とその批評

第四節 Briggs の學說とその批評

第五節 Frz. Delitzsch の學說とその批評

第二節 創三ノ一四、一五はメシアの豫言ならず只福祉の誓約のことばと解する學說……………七九—八二

第一、Hengstenber の學說とその批評

第二、Strack の學說とその批評

第三、Stahelin の學說とその批評

第四、Engelhardt の學說とその批評

第三節 創三ノ一四、一五をメシア豫言ならず、福祉の誓言にも非ずと解する學說……………八二—八八

第一、Driver の學說とその批評

第二、Ryle の學說とその批評

第三、Barrett の學說とその批評

第四、Skinner の學說とその批評

第五、Hitzig の學說とその批評

第六、Holzinger の學說とその批評

第七、Kautzsch の學說とその批評

第四節 余の見解……………八八—九五

——研究方法論上の在來諸說一切の誤謬——全ヤウイストが描いて居る畫像——「過去のメシア」——全ヤウイストから眺めた創三ノ一四、一五——物語のエバ——物語の蛇——物語の女のすゑ——物語のこころ——

第二 創八ノ二〇—二三……………九五—一〇〇

試 譯……………九五—九六

在來の研究とその批評……………九七—一〇〇

第三 創九ノ二五—二六……………一〇〇—一〇四

試 譯……………一〇〇—一〇一

在來の研究とその批評……………一〇二—一〇四

第四 民祖アブラハム、イサク、ヤコブに關する「メシア豫言」序(物語の通觀)……………一〇五—一〇六

試 譯……………一〇六—一〇七

物語の通觀から眺めた此等の箇所……………一〇七—一〇九

此等を「メシア豫言」となす學說とその批評……………一〇九

歸結……………一〇一—一一

第二部 エロヒストのメシア思想

序……………一三—一四

第一章 エロヒストの福祉物語……………一五—二〇

第一節 個人の福祉……………一五—一六

第一項 神の救拯

第二項 神の福み

第三項 神の嚮導

第二節 子孫一家の福……………一六—一七

第一項 子福

第二項 子孫の福み

第三節 國の福祉……………一七—一九

第一項 國家隆興

第二項 國難からの救ひ

第四節 他國民の答禍……………一九—二〇

第二章 エロヒスト物語の授福者「過去のメシア」……………二一—二五

序……………二一

第一節 その誕生と生立ち……………二一—二二

—誕生—生立ち—

第二節 その人物……………二二—二四

第三節 他を福ひするもの……………二四—二五

—他を救拯—Firsprecher—Derleidende Messias—

第三章 過去の福祉の物語としてのヤウイスト、エロヒスト比較……………二六—三四

第一 正義の思想有無……………二六—二七

第二 「過去のメシア」の人格……………二七

第三 過去の福祉の物語と未來の福祉の翹望と……………二八—二九

第一編の歸結……………一三〇—一三四

—宗教とは—J*の利福思想(ヤコブ型の)—利福より福祉へ、ヤコブよりメシアへ—福祉物語—その中心は「過去のメシア」—「過去のメシア」を物語った記者現在の欲求(福祉翹望)—

第二編 メシアの幻滅

序……………一三七—一四一

—豫言者が開いたイスラエル宗教文化の新たな道—在來の道—「過去のメシア」の思想に反抗してメシアの幻滅を説いた豫言者—亡國の悲哀—メシアの福祉に反抗したメシアの幻滅が唱へられて此にイスラエルの宗教文化は二潮流を生ず(民衆と豫言者)—

第一部 アモスの説いたメシアの幻滅

序……………一四三—一四八

—福祉の世—世の福祉に逆行した野の人、アモス—メシアの幻

滅亡國の悲哀が説法の主題—

第一章 國民批判標準……………一四九—一五四

第一項 神觀……………一四九—一五二

—在來の神觀—アモスの神觀—民と特殊關係にある神—世界の神—而も特殊の神—特殊の福祉關係は唯だ正義と求神とを條件としてのみ成立する正義の神—

第二項 宗教觀……………一五二—一五四

—内的な宗教—倫理的、概然的(條件的)特殊關係—

第二章 過去及現在批判……………一五五—一六七

第一項 過去の國民批判……………一五五—一五六

第二項 現在の國民批判……………一五六—一五八

—富者、強者の罪(傲奢、安逸、横暴)—神を求めぬ國民(異教的宗儀、外的宗教、聖殿内の罪惡、立ち歸らざる民)—要説—

第三章 國民將來の批判……………一五九—一六三

—序—已に下つた咎禍—最後—終り至つた—敵—捕囚—富者、強者—王家—邸—聖所—rethor—「その日」—

歸結 メシアの幻滅、亡國の悲哀を説いた豫言者アモス……………一六四—一六七

第四章 所謂メシア豫言九ノ研究……………一六八—一八二

本文試譯……………一六八—一七二

逐節研究……………一七二—一七六

總體批評……………一七六—一七八

Einheit たりとする學說とその批評……………一七八—一八〇

歸著……………一八〇

總歸結……………一八〇—一八一

第二部 ホセヤの説いたメシアの幻滅

序……………一八三—一八七

—家庭問題の解決即ち思想問題の解決—家庭のなやみ即ち社會のなやみ—妻と民とに斷乎たる宣言—メシアの幻滅—

第一章 國民批判の標準……………一八八—一九三

第一項 神觀……………一八八—一九二

—神と民(神は夫、民は妻)—愛の特殊關係(理論上の前提)愛の事實—特殊の愛の絶縁—特殊の愛は昔の夢—愛の倫理的、概然的(條件的)特殊關係—愛を條件とした神

第二項 宗教觀……………一九二—一九三

—他神—他神との「姪行」—邱、祭壇偶像—他神への事大—内心の宗教—

要説……………一九三

第二章 過去及び現在批判……………一九四—二〇一

第一項 「姪行」の過去及び現在(ホセヤの歴史的觀察)……………一九四—一九五

第二項 宗教的「姪行」……………一九五—二〇〇

第三項 「姪行」の主……………二〇〇—二〇一

第四項 社會の「姪行」(カナン人)……………二〇一—二〇一

要説……………二〇一

第三章 將來批判……………二〇二—二〇三

—告(罰)刑罰の日—王—祭司—民—捕囚—彼の王—此の土—宗

儀不可能—愛の破滅—國家の亡滅—

歸結……………二〇四—二〇七

開—豫言者ホセア—アモスとホセアの一致點—差異點(思想の展

第四章 所謂メシア豫言……………二〇八—二一六

第一 二ノニ……………二〇八—二二二

試譯……………二〇八—二〇九

原文研究……………二〇九—二二二

第二 三ノ四、五……………二二二—二二六

試譯……………二二二—二二三

原文批評……………二二三—二二五

總歸結……………二二六

第三部 エザヤの説いたメシアの幻滅

序……………二二七—二三一

—カ恐ろしき神の幻 Berufungsvision—殿上人、エザヤ—メシアの幻滅—

第一章 國民批判の標準……………二二三—二三一

—力の神—カ恐ろしい神を恐れるのが人の道—カ恐ろしい神を恐れて神の義を行ふこと—カ恐ろしい神を恐れて他を恐れぬこと(反事大)—カ恐ろしい神の亡國—正義の神の神罰—民の神の神罰—メシアの幻滅—要説

第二章 過去現在の國民批判……………二三二—二五四

序……………二三二

第一期 七四〇—七三五年間の彼れの國民批判……………二三三—二四〇

—戰捷王ヤラベアム二世以後の王位相奪—戰閥の横暴の(極は)群雄の王位相奪—戰閥(強者、富者)の奢多安逸—戰閥の宗教無關心—戰閥の不義—戰閥の福祉堯望(ヤルウエの日)—メシアの神罰(幻滅)—エザヤの政治批判—大王の難とメナヘムの納貢(反アラム、親アツシリア政策)—エザヤの事大批難—メーカツハの親アラム政策—メーカツハ、レザン結んでユダ王ヨータムに迫る—エザヤの戦争豫言—

第二期 シリア、エフライム戦時(七三五—七三三)……………二四一—二四四

— 戦勝祈願とエザヤ — ユダ、アツシリアへ救ひを求む — エザヤの諫言 — エザヤの國民警告 — 故里に崇められざりしエザヤ — 大王襲來、戦争終結、シリアの亡滅とイスラエルの致命傷 —

第三期 戦後のイスラエル、ユダ(七三三—七二二)……………二四四—二四七

— 戦後のユダ — 戦後のイスラエル(辱辱の試み)イスラエルの亡國 — ユザヤの亡滅豫言 —

第四期 イスラエルの亡滅よりアシユドトの戦まで

(七二二—七〇五)……………二四七—二四九

— アハズの超然政策 — ヒスキアの反アツシリア、親エザプト政策 — アシユドトの戦ひ — エザヤ、事大を誡む —

第五期 エヂプトと同盟締結(七〇五)の頃……………二四九—二五〇

— パピロニア勃興 — エザプトとの同盟 — エザヤの事大痛罵 —

第六期 サンヘリツブ西征(七〇一)の頃……………二五〇—二五三

— 大王の襲來、エルサレムの圍み — エザヤの亡國威誠 — ヒスキヤ、エザヤを訪れて代禱を請ふ — シオン、脱る — 國民の狂喜 — 福祉を誇る民衆と福祉を説く民衆的豫言者 — シオン、幻滅を説いたエザヤ —

要説……………二五四

第三章 將來批判……………二五五—二五九

— 亡滅、幻滅の「其の日」 — Resigedanke — Läuterungsgericht —

歸結……………二六〇—二六三

第四章 所謂メシア豫言……………二六四—三〇〇

第一 四ノ二……………二六四—二六八

— 試譯 — 在來の學說とその批評 — 余の原意釋義 —

第二 七ノ三—六……………二六八—二八九

— 試譯 — 余の解釋(全意) — 細説、其一、當時の他の Aussage のところ — 細説、其二、七ノ一〇—二一の通觀(豫言の思想、思想を假託する休徴、豫徴自體、豫言と象徴との不一致、其の事情、豫徴釋明方法、釋明し得た結果) — 細説、其三、在來の學說とその批評 — Bahl — Vols — Gushie — Sellin —

第三 九ノ二、六……………二八九—二九五

— 試譯 — 在來の學說とその批評 —

第四 一一ノ二、八……………二九五—三〇〇

——試譯——原文研究——

歸着……………三〇一

第四部 ミカの説いたメシアの幻滅

序……………三〇三

第一章 國民批判の標準……………三〇四—三〇五

第二章 國民批判……………三〇六—三〇八
——富者、強者——侯伯——都會——

第三章 將來批判……………三〇九—三一〇

歸結……………三一—三一五

第四章 所謂メシア豫言……………三一六—三二〇

第一 二ノメシヤ……………三一六—三一八
——試譯——原文批判

第二 五ノメシヤ……………三一八—三二〇
——試譯——原文批評——

歸着……………三二一

本編歸結……………三二二—三三〇

第三編 「現在のメシア」法

(民衆の福祉思想に反抗せる豫言者との調和)

序……………三三三—三三九

——豫言者——民衆——豫言者と民衆との對峙——國君ヨシヤ——ヨシヤの申命記法——法は民衆と豫言者との調停——法——「現在のメシア」——「過去のメシア」より「現在のメシア」へ——
附、申法研究順序

第一章 法の社會的方面

第一節 法の社會的自覺……………三四一—三四九

甲 土地に就いての國土的自覺
乙 人民に就いての國民的自覺
丙 統治者に就いての國家的自覺

歸着—國家的自覺
附、家感念

第二節 法の社會的規定

三四九—三八三

第一項 法

三四九—三五五

—憲法の理由—法の權威—法の要求—法對社會、豫言者對社會—

三五五—三七〇

甲 土地、人民、統治者

乙 中央組織

—首都の中央廳—中央廳の官吏—中央集權—中央廳に士師の官なし—

丙 地方組織

其一、支族

其二、町

—町—町の長老

其三、「門内」

—門—「門内」—「門内」の職制—

其四、家

本項要説

第三項 犯罪の處分に關する法規

三七〇—三八〇

甲 犯罪の調査

乙 犯罪の種類

丙 刑罰の種類

丁 刑の執行

戊 處刑の目的

己 處刑の標準

庚 「邊れの町」

本項要説

第四項 習俗の整理に關する法規 三八〇—三八二

甲 親族に關するもの

其一、結婚の法規

其二、親子の法規

其三、相続の法規

乙 居住、衣服に關するもの

丙 境界に關するもの

丁 風俗に關するもの

本項要説

第五項 戦ひに關する法規 三八二—三八三

第六項 誠 三八三—三八六

本章の歸結 三八三—三八六

第二章 法の道德的方面

法の愛(人道的精神).....三八七—三九六

- 甲 貧者に對して
- 乙 弱者に對して
- 丙 受胎
- 丁 受敵
- 戊 動植物愛護
- 己 義

本章總説.....三九六—三九八

第三章 法の宗教的方面

第一節 除惡の法規.....三九九—四〇八

- 第一項 異教
- 甲 異教の他神
- 乙 異教の宗儀
- 丙 異教の宗教習俗
- 第二項 汚れ
- 第三項 血の汚れ

第二節 整儀の法規.....四〇八—四一六

- 第一項 祭事

第二項 祭典

第三項 供物

第四項 祭場

第五項 つかへひと

第三節 法の神觀.....四一七—四一八

第四節 法の正邪觀.....四一八—四二三

第四章 法の究竟目的——惡を除き福祉を護んとの心.....四二四—四三九

第五章 法とメシア期俟.....四四〇—四五五

——法の「メシア」豫言「一八ノ一五、——一九の研究——

第四編 メシア幻滅とメシア

思想との争ひ

上、法の後學

序 申命記法の後學兩種とメシア思想.....四五九—四六八

申命記法と申法後記と——申法後記の「メシア國」——「申法後記」は申

法の歴史的後學——申命記法の意義者的後學は「申法律學」と譯言者
 セフアンヤ——過去のダビデを「過去のメシア」と理想化せる「申法後
 學」は「未來のメシア」を「未來のダビデ」(第二のダビデ)と期待するメ
 ア期待への過渡——
 附、申命記法への種々な後記類

第一部 申法後記が説く「現在のメシア」法

序……………四六九—四七〇

第一章 法の由來……………四七一—四七三

第二章 後記の Heiligedanke……………四七四—四七九

 第一項 法の性質を説いた後記中の Heiligedanke

 第二項 法の由來を記した後記中の Heiligedanke

第三章 後記と Heilandswartung……………四八〇—四八三

第二部 「申法後學」が説く「過去のメシア」
 序……………四八五

第一 「申命記書内の申法後學の Heiligedanke」……………四八六—五〇三

序……………四八六—四八七

第一節 「申法後學」は神を如何様に論じて Heil に説及んだか……………四九二—四九八

 ——愛の神——義の神——力の神——神の表むるところ——要説——

第二節 「申法後學」は民を如何様に論じて Heil に説及んだか……………四九二—四九八

 ——聖民——實民——振民——愛民——値へせざる民——要説——附、申法後記と申法後學と——

第三節 「申法後學」は法を如何に論じて Heil に説及んだか……………四九八—五〇一

 ——法と法の後學と——法は生命の糧——法は Heil のもと——法の由來——法の蘊奥——

第四節 「申法後學」は Heil を如何様に説いてこれを勧めたか……………五〇一—五〇三

 ——種々の Heil——申法後學の Heil と所謂 Heilzeit の Heil——種々の Unheil——

總説……………五〇三

第二 申命記書以外の五書内は於ける申法後學……………五〇三—五〇四

第三 士師記内の申法後學——申法後學のメシア思想(一)……………五〇四—五〇九

そのメシア思想の性質——メシア序述——他の類似思想との對比——

第四 サムエル書列王紀内の申法後學——申法後學のメシア

思想(二)……………

五〇九—五一四

第一節 列王批判に現はれた Heilsedanke

第二節 列王批判に現はれた Heiland (ダビデと聖殿と)

總説……………

五一五—五二〇

下、豫言者の部

第一部 反民衆的豫言者、セフアンヤ

序……………

五二三

第一章 國民批判の標準……………

五二四—五二五

第二章 現在の國民批判……………

五二六—五二七

第三章 將來批判……………

五二八—五二九

歸結……………

五三〇

第二部 民衆的豫言者、ナフォーム及ハバククの福祉謳歌

序……………

五三一—五三二

第一章 ナフォーム福祉興國の叫び……………

五三三—五四六

第一節 ナフォームの思想内容要説……………

五三三

第二節 在來の豫言者の思想に對するナフォームの反抗……………

五三三—五四〇

第三節 福祉興國を謳歌してナフォームは確に民衆的である……………

五四〇—五四三

第四節 ナフォームとエレミヤとの争闘……………

五四三—五四五

歸結……………

五四六

第二章 ハバククの福祉興國の叫び……………

五四七—五三一

第一節 如何なる國民批判の標準から自國の福祉、興國、

敵國の咎禍、亡滅を説いたか……………

五四七—五四八

第二節 如何なる現在の國民批判からメシア幻滅亡國の

第三節 實言に反抗して興國、禱禱を説いて居るが……… 五四九—五五一
 第三節 ハバツクの將來批別……… 五一
 譯 結……… 五〇二

第三部 反民衆的豫言者、エレミヤ

序……… 五五三

第一章 彼れの僞仰……… 五五四—五五六

——在來と異らぬ豫言者の道——彼れに新しき「契約」觀念——

第二章 彼れの生涯（メシアの幻滅を叫んで民衆の福祉の思想と闘つた彼れの信仰的生涯）……… 五五七—五七四

——豫言者としての出現——アツツリア衰微——ヨシアの改革——ヨシアの最期——ヨシアとエレミヤ——反エゲプトのヨアハス——エゲプト襲來とヨアキム——アツツリア亡滅——民衆の狂喜とエレミヤの苦悶——亡國の叫び——聖殿の亡滅——桎梏——死刑——聖殿出入の禁——火書の難——無言の說法——ナフーム、ハバツク等民衆的豫言者エレミヤ（福祉譚歌と福祉否定）——醒めだる自己——豫言者エレミヤ遂に民衆を呪ふ——自己を呪ふ——酔うた民衆、醒めた豫言者——バビロニア來、カルケミシエ——ヨアキムの叛謀——エコンヤ——

第一の捕はれ——捕はれの後のユダ、セデキヤ——猶も興國の夢——セデキヤの叛謀——エレミヤの亡國警諭——幽閉——土牢——阱——亡國

第三章 所謂メシア豫言……… 五七五—五八〇

第一 二三ノ五、六（二三三ノ一四、一五）……… 五七五—五七九

第二 三〇ノ九、二一……… 五七九—五八〇

本編歸結……… 五八一—五八四

第五編 未來のメシア

第一部 エゼキエルによつて初めて説かれた未來のメシア

序 「メシアの幻滅から未來のメシア」へ……… 五八七—五八八

第一章 「メシアの幻滅」と「亡國」の悲哀とを絶叫した豫言者エゼキエルの前半生……… 五八九—六〇五

序……… 五八九

國民批判標準……… 五九〇—五九八

其一、正義
 —正義の神—正義の宗教—各人應報説(寧ろ個人處罰説)—
 Individualism—唱へられた正義は申法の正義—儀文の教へ
 ユダヤ教の基—
 其二、愛

過去批判……………五九八—六〇〇

其一、第十六章

其二、第二十章

現在批判……………六〇〇—六〇三

將來批判……………六〇三—六〇五

第二章 福祉の到来、歸郷の希望
 興國の期侯、メシアの出現 後半生のエゼキエル……………六〇六—六一五

—亡都と民衆—亡都と豫言者—威誠より慰諭へ—亡都前と後
 との應報説—亡都前の亡滅の威誠と亡都後の福祉の慰諭と。其一
 横断面—其二、縦断面—

第三章 メシア豫言……………六一六—六一八

第一 一七ノ二二、二四……………六一六—六一八

第二 二二ノ三〇、三二(和)、二五、二七……………六一九—六二〇

第三 三四ノ二三、及び三七ノ二四、二五……………六二〇—六二一

エゼキエルの説いたメシア……………六二一—六二四

歸結……………六二五

第二部 「第一エザア」が説いた「未來のメシア」

序……………六二七—六三三

上「第二エザア」が説いた「未來のメシア」

第一章 神を如何に觀じて「未來のメシア」を説くに至つたか……………六三四—六三九

—序—「豫言」から「神學」へ、「豫言者」から「思想家」へ—創造主—宇宙神
 —擁護の神—唯一神—唯一の救ひの神—唯一の力の神、全能の
 神—偶像他神の否定—以上の證明、證人イスラエル—全智—主—
 —王—要説—

第二章 民を如何に觀じてこれに「將來のメシア」の

福祉を説いたか……………六四〇—六四三
 —イスラエルの神—イスラエルの聖者—イスラエルの救主—
 義民(僕僕)—神寶—イスラエルの創り主—イスラエルの贖主—
 始めなり、終りなり—要説—

第三章 如何に民の現在及び将来を批判して、これに福祉の将来

将来のメシアを説いたか……………六四四—六五三

—通論—現在苦難—現在の苦は轉じて福となる—理由—鋭き
—慰諭—現在批判歸結—福祉の将来—未開事—歸國の途につく—
—将来のメシア、クロス—歸國の途上—歸國の結果(福祉愈到る)た
とへ難期に反したとて—シオンの福祉—

下「第二エザヤ」が譁つた「世界の光」—「主のしもべの歌」の研究……………六五四—六六二

—序—Ebed-Jahweとは—語義—意義—「主のしもべ」とは何人か—
—個人、キリスト、イエスか—民、イスラエルか—余の批判—Ebed-
Jahweとは單にVolkでもなく、單にPersonでもなく、VolkのPersonification
と余は解する—特別聖語—靈を興へ—身を備へ—そこに天職
のイスラエルがある—在來のイスラエル—現況の奥の宗教的意
義—贖罪主、救主、「主のしもべ」—受難のメシア、贖罪のメシア、中
保のメシア、救世主メシア—

歸結……………六六三—六六五

研究歸結……………六六五—六八二

目次終

はしがき

序 文

に代へて、此に、私の研究の過程並に研究の歸着を
はしがきします

メシアの問題は舊新約を通じて、信仰の生命、思想の中心！ と心づ
いて、この問題専攻の志望を恩師、姉崎先生にはかりましたのは、私が學校
を出て、そして直ぐ、ドイツへ赴いた年の翌年、即ち明治四拾參年のこと
であつたと記憶します。

恩師は、激勵のことばを送りこされました。私は愈、問題専攻の決意を
固めました。

以來、引續き斷えざる指導と盡きざる溫志、私は、此に、ただ、ただ、恩師の溫
情に感謝するのみであります。

ベルリンに研究約二年の後、留學地を三ヶ年ライプツィヒに移しました。ベルリンに於て、またライプツィヒに於て、私は、この問題を Prof. Herrmann Strack, Prof. Rudolf Kittel, Prof. Herrmann Gunkel などに計りました。

Abzaten! Wieder abzaten! Nochmals abzaten! (まあ止したらいい)

メシア問題は現今の舊約研究に於て行き詰つて居る。難きに過ぎる。結果は出まい。と云ふのが異口同音な解答でした。

それならばやつて見ようと云ふ、つむじ曲りな元氣が私を愈、研究に踏み込ませました。研究から湧いて出た個々の問題を夫等の先學に叩きました。先學の懇ろなる指導を此に、感謝します。

メシア問題に對する近時の研究は、左に擧ぐるものだけのやうに思ひます。

J. J. Stähelin: D. messianischen Weissagungen Berl. 1847.

E. W. Hengstenberg: Christologie d. A. T. und Commentar über die Messianischen Weissagungen 3 Bde. Berl. 1854-56.?

F. Hitzig: Vorlesungen üb. bibl. Theol. und messianische Weissagungen d. A. T. Karlsruhe 1880.

E. Böhl: Christologie d. A. T. od. Auslegung der wichtigsten messianischen Weissagungen. Wien 1882.

Ed. Riehm: Die mess. Weissagung, ihre Entstehg., ihr zeitgeschl. Character u. ihr Verhältnis zu der ntl. Erfüllung. Götta 1885.?

Ch. A. Briggs: Messianic Prophecy N. Y. 1886.

Wm. Thomson: Christ in the O. T. or the great Argument. N. Y. 1888.

Franz Delitzsch: Messianische Weissagungen in geschl. Folge. Berl. 1899.?

E. Hühn: D. mess. Weissagungen d. isr.-jüd. Volkes. Freib. i. B. 1899.

P. Volz: D. vorexil. Jahweprophetie u. der Messias. Götting. 1897.

G. S. Goodspeed: Israel's Messianic Hope. N. Y. 1900.

- Wm. Müller: D. mess. Erwartung der voreril. Propheten. Gütersloh 1906.
E. Sellin: Die israelitisch-jüdische Heilandserwartung. Berl. 1909.
Joh. Döllner: Die Messiaserwartung im A. T. Münster in Westfalen. 1911.
P. Wolf: Messianische Weissagungen (Nur Texte abgedruckt) Trier 1911.

以上の研究が発表されて居ます。が、然し、實際、メシア研究は行き詰つて居ります。

そこには三種の解が並び行はれ、互角の間に鼎立して無解決のままに行き詰つて居るのです。

一ツは、メシア豫言を肯定する信仰的解釋。それは主として、*Fitz*, *Delitzsch*, *Sraack*, *Briggs* 並びに *Döllner* によつて代表されて居ます。

二ツには、メシア豫言(捕囚前の)の全部を(或は *unecht* として、或はメシアを意味するに非ずとして)否定する批評的解釋。それは主として、*Volk*, *Guthe*, *Marti* 等所謂 “*Wellhausensche Schule*” の正系に屬するものに依つて唱へられて居ります。これらの人々は總じて捕囚前に於けるメシア思

想の存在を否定して居ます。

三ツには、メシア豫言全部をアッシリアの宗教思想早熟の事實から推して肯定せんとするもの。それは所謂 “*Religionsgeschichtl. Schule*” (余は寧ろ *Assyriologische Schule* と名づけたいのですが)に屬する *Sellin* によつて主として唱へられて居ります。

三派は互角に鼎立して、問題は無解決に、行き詰つて居ます。

が、研究を重ねて行くうち、私は不圖、氣付きました。

三者は、悉く、メシア豫言に拘泥して居る。メシア思想の研究をメシア豫言の研究に限つてしまつて居る。肯定するものも、否定するものも、メシア豫言の解釋は、即ちメシア思想の解決であるとしてゐる。此に、確かに、缺陷がある！と。

肯定するものにとつて——(所謂メシア豫言は眞のメシア豫言である

と肯定するものにとつて)——所謂メシア豫言は、舊約中のメシア思想を吾人に傳ふる全部であらう。否、彼等が、舊約のうちからメシアに關するものを拾ひ出したものが所謂メシア豫言なのである。彼等にとつて、メシア豫言の肯定は同時にメシア思想(存在)肯定なのである。そこに論理は一貫して居る。

然し、所謂メシア豫言は彼等が唱へる様に、眞のメシア豫言たり得ようか。研究の結果、私は否と答へざるを得ないので。それは、到底、科學的批評的研究の前に保たれ得ない所説であるのです。

私は、所謂メシア豫言(捕囚前)に眞のメシア豫言はないと主張するのです。此の點は大體に於て否定派——Wallauensche Schule——と説を同じうするので。

但し、否定派の先學は云ひます。

所謂メシア豫言(捕囚前)に眞のメシア豫言は無い。従つて(!)メシア思想(„Messiasidee“)は、(捕囚前)に無いと。

否定派の此の結論は、然し、當時のメシア思想の總てが、ただ「メシア豫言」にのみ現はれ盡されて居る場合に限つて、初めて成立し得る結論だと考へます。

否定派は確かに一つを自明の事でもあるかの如く前提して居るのです。即ち、メシア思想は、悉く表はれて「メシア豫言」に在る。「メシア豫言」は當時のメシア思想の表はれの全部である。「メシア豫言」以外にメシア思想は潜まないと云ふことを前提して居ると考へます。「メシア豫言」以外の舊約史料にメシア思想は潜まない。「メシア豫言」に眞のメシア思想がない以上、メシア思想は當時に無いと結論したのが否定派の結論です。

さて、然し、否定派の前提「メシア豫言」以外にメシア思想潜まずと云ふ前

提は正しいのでせうか。

正しい、正しくないは研究の歸着點です。が、とにかく、正しいか正しくないか問題にだけはして見ねばならぬと思ひます。イキナリ、無批判に、自明なことでもあるかの如く(メシア豫言)以外の舊約史料に當時のメシア思想を傳ふるもの無しと前提してしまつたところは確かに否定派の缺陷であると思ひます。

そこで私は、否定派によつて「前提」とされたところを「問題」として、果して「メシア豫言」以外の當時の史料にメシア思想を傳ふるもの無きかを究めねばならぬと心しました。

一體、否定派は、肯定派が撰んだ結果(「メシア豫言」を否定して、撰び方そのもの(メシア思想の表現は、悉く、撰び集めてメシア豫言にありてふ)を無批判に肯定し、襲用して居ると思ひます。否定派は、前きの肯定派の撰ん

だ結果を吟味するまでには至つて居るが、肯定派の撰び方そのものを吟味するまでには至つて居らぬと考へます。それは、肯定派の信仰的、主觀的態度から客觀的、學的態度へ半ば脱離して、而も、まだ全く脱離し得ないで居ると思ひます。否定派も、まだ、學的研究の半途にあるものと考へます。不徹底だと思ひます。だから議論も片付かず、研究も行き詰つて居るものと考へます。

メシア問題の研究を、行き詰りから脱離させ、行き悩みから救ひ出す、唯一の道は、メシア思想を(メシア豫言に求むる外に)尙、進んで(舊約一般に)求むるにあると思ひます。メシア思想を究めて、現在鼎立の間にある三派が何れも何れも、ただ「メシア豫言」のみに拘泥して居るに反し、その共通缺陷から脱却して、況くメシア思想を舊約一般に求むるにあると考へます。舊約一般を史料として、そこにイスラエル民の一般宗教思想の發達を眺め、一般文化の推移のあとを究め、その上から廣くメシア思想の展開

のあとを究むるにあると考へます。

然し、それは、現在鼎立の間にある三派は勿論、古今東西、總ての學徒、總ての信徒によつて未だ曾て企てられなかつた新しい試みなのです。私も幾度か、此の研究に、ためらひました。

然し、メシアの問題は信仰の生命、思想の歸着！これは、單に舊約中の最小一部、メシア豫言などに局限さるべき問題ではないのです。メシア豫言のみの研究者に一任すべき問題ではないのです。舊約一般に、宗教全史に、否、文化全史に解決を求むべき問題と考へます。而も、その試みは未だしいのです。……これ淺學を願る違もなく、自らを忘れ、遮二無二、私がこの問題の研究に没頭した所以なのであります。

研究の結果は貧しい此の論文一部を成すに至りました。問題の解決を一小局部、メシア豫言に限らず、廣く、舊約一般、宗教一般、文化一般に求めただけに、若し、當らざるも遠からざる解を求め出し得たとすれば身に餘る光榮と存じます。

研究の結果

研究の結果、私は「メシア豫言」以外の舊約史料に多くのメシアを見出すに至つたのです。

ところで、在來のメシア問題研究總ては、一つ残らず皆「メシア豫言」以外にメシア無してふ前提の下に立つたものです。夫故、在來のメシア研究は此に於てか總て其の根柢を失はねばならぬものと考へます。

私は、捕囚前の豫言者のそのまた前の歴史物語 J. (Jahweid) 及び E. (Elohim) のうちに既に多くのメシアを見出しました。それは肯定派の唱ふる如く「メシア豫言」の個所に於てはなく——所謂「メシア豫言」に眞の「メシア豫言」は此の時代、有りません——「メシア豫言」以外の個所に於て、見出された多くのメシアは、歴史物語のメシア、過去の歴史に物語られたメシアです。私は、それを、假りに名づけて「過去のメシア」と命名しました。

それは期俟された『未來のメシア』ではないのです。未來のメシアの豫言ではないのです。「過去のメシア」の物語なのです。ともあれメシアの思想たるに於ては一です。この「過去のメシア」が思想上の準備となつてこそ後の「未來のメシア」が産れたものと考へます。

歴史物語のうちなどに、そして、また捕囚前の豫言者の其のまた以前の時代の史料などのうちに、メシアの俤は潜んで居るのです。舊約は最も古いところから、最も廣い範圍に渡つて、メシアの姿を包んで居るのです。メシアは、殆ど舊約全體にその姿を現じて居ると云つてもいゝかと思ひます。

但し、舊約中の最古の最小史料¹⁾「最古のヤヅイスト」には、メシアの思想はありません。メシアの思想と正反對な私の所謂「ヤコブ型の利福思想」があるのみです。これがメシア思想の前史と考へます。

それから出發して、メシア思想に入り、直ちに「一般ヤヅイスト」の「過去

のメシア」を現して居ると考へます。

その後、然し、已に存して居つた「過去のメシア」の思想に、反抗して「メシア幻滅」を、といったのが捕囚前の豫言者と考へます。否定派の學者が云ふ如く、捕囚前の豫言者時代に、總じてメシア思想は未だしいと見るべきものではなく、さう見たのは彼等が一般を見ず、メシア豫言にのみ研究を局限した結果の膠見、メシア思想はイスラエル宗教史の殆ど最初から、過去のメシアの形に於て存續し來り、それに反抗して「メシア幻滅」を説いたのが豫言者だと考へます。

その豫言者に「メシア豫言」を求め、肯定派はやはり水に映つた月影を捉へんとする徒です。私も、水に映つた月影の美はしきは美はしきとして賞でたいと思ひます。が、然し、なにも、水に映つた月がほんもの、*celle*な月だと頑張りはないつもりです。水の月を *celle* の月と心得るものは、水の月をのみ見入つて、仰いで天を眺めることを忘れて居るものと考

へます。メシア豫言をのみ見つけて、豫言者の思想一般、文化一般、當時の世界一般を眺めないものに限つて「メシア豫言」を捕囚前の「メシア幻滅」の豫言者に求むるものと考へます。

捕囚前の豫言者が説いた「メシアの幻滅」が實現したのは「亡國の悲哀」の時です。この時から豫言者の豫言も變りました。それは「亡國、メシア幻滅の威誠ではなく、興國、メシア到來の豫言」となりました。此に「未來のメシア」が説かれ始めました。

「未來のメシア」は豫言者エゼキエルから説かれ始めました。(否定派の云ふ如く)。然し、否定派の云ふところと異つてメシアの思想はエゼキエルに始まつたものではありません。「未來のメシア」は彼れに始まり、メシアが「過去のメシア」——メシアの思想はイスラエル宗教文化の殆ど最初から、そこにあつたのです。そこに思想の順備があつたのです。否定派がこれを認めないのは彼等が誤つた前提からメシアの探究をメシア豫言

に限つた誤りの結果だと考へます。

初めに「過去のメシア」が物語られ、次に「メシアの幻滅」が叫ばれ、後に「未來のメシア」が豫言されたと考へます。そして「メシアの幻滅」から、それと正反對の「未來のメシア」期俟へ移り變つたその過渡をなして居るものは申命記法の「現在のメシア」と考へます。

それが移つて「未來のメシア」期俟となつたと考へます。それは豫言者エゼキエルからです。そして、それは「第二エザヤ」に於て思想的に完全の域に達したのです。

由つて、この論文もそこに筆を納めました。

追記。研究結果の陳述について一言追記させて戴きます。

在來のメシア研究は即ちメシア豫言研究でした。メシア豫言研究に就いては参考書も三、五頁に掲げました様に多々あります。私の

研究も其の部に入つた時は一々夫等を参照しました。

が、在來のメシア研究は、メシア豫言研究以外に一步も出ませんでした。メシア豫言以外に就いてのメシア研究に對しては、そこに一部の参考書も存しません。然し、それを幸ひ、原文の原典に溯つて、直接、そこに、私は、問題の解決を求めました。獨りで新しい天地を舊約に開拓しました。例へば、舊約を材料に一種の創作でもします様に。最後の結果記述に際しても、此の部だけは、参考書一つ引用しませんでした。それは、独自の研究の獨自を保たせんが爲めです。殊に、此の種の研究などは、動ともすれば、單に歐洲人の糟粕を嘗めるに過ぎぬと云ふ批難を浴せかけられますからです。それ故、研究結果記述の際、私は、ことさら参考書一つ開きませんでした。ただ、曾て試みられなかつた新たな研究題目に就いて自ら原典に求めて得たる解決を記述するにと、めしました。勿論、そのうちにも、今迄、私が讀みこなしました數知れの参考書が血となり肉となつて、自分の研究の生命を肥やして呉れて居りま

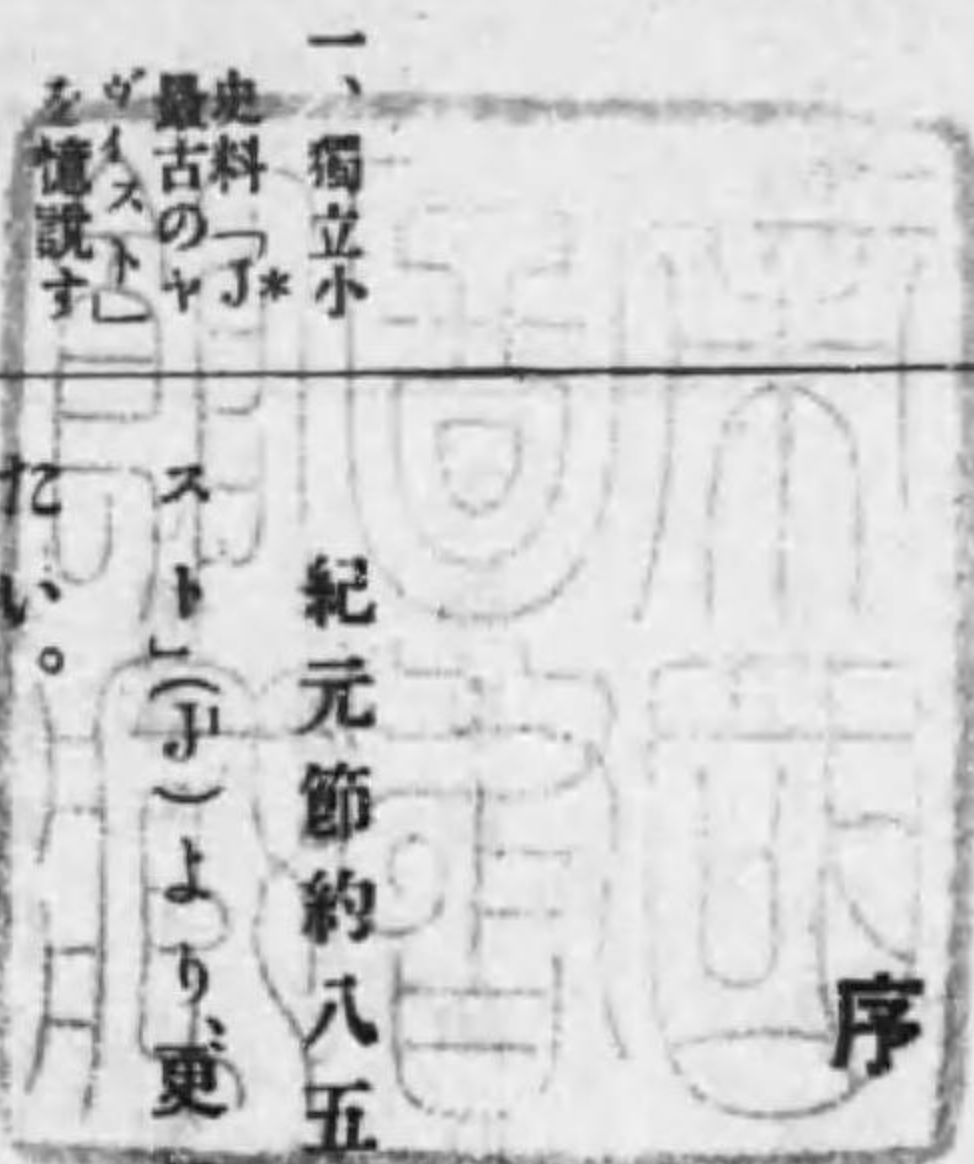
すことを私とて拒むものではありません。否、先學の研究こそ私をこの地盤に培ひ、新天新地に芽ぐませたものと、感謝に堪へぬ次第であります。たゞ陳述に際して舊き革囊を捨てて、たゞ新しき酒に酔うて亂れただけであるのです。

序編 メシア思想前史

ヤコブ型の利福思想

最古のヤヴイスト(J)

序説 史料「最古のヤヴイスト」に就いて



一、獨立小
史料「J」*
最古のヤ
ヴイスト
を憶説す
紀元節約八五〇年に記されたヤヴイスト Javvite(J)より更に古い「第一ヤヴイ
スト(J)」より更にまた以前の「最古のヤヴイスト(J)」と云ふものを自分は憶説し
た。

範圍

創三ノ二三と同六ノ一、三、と同一ノ一、九、と而して同三二ノ二五、二六、二八、二九、(和譯
二四、二五、二七、二八)とが一小史料「最古のヤヴイスト(J)」を成すと考へる。

一史料をなすものと考へる。思想と用語とに就いて、そこに自らを他から別
つ獨自性があり(三ノ二三、への附註參看)自らのうちに統一性があるからである。
(思想に關しては、次章——本部第一章第二章參看。また用語に就いては、同一用

憶説への理
由

最古のヤヴイスト(J)*

語を同一譯語を以て譯出したる左の試譯を参照。

最古のヤグイストと考へる。在來、特別古いヤグイストとして知られたるJよりも更に古いからである。(次ぎの試譯に附したる附註參看)。

かくして夫等はヤグイスト中にあつて獨立の一小史料「最古のヤグイスト」をなすものと考へるのである。

著作年代としては、一般ヤグイスト(J)の年代八五〇年より以前と考へる。然し、例令ヤボク河の主(ぬし)に關するカナアン人の土俗神話をヤールウエ神話にかへて居るところから見てもカナアン定住後、程あつてのものと思はれる。統一王朝以前、士帥時代末期、先づ一〇五〇——一〇〇〇年頃のものであらうか。

先づ、その内容を試譯したい。かけこば、Wortspielのところには、**圈點**を附して、これを示す。

創世紀三ノ二ニ……〔不老不死の樹の實〕—

其の時、神ヤールウエの申さるには、

『あの人間を見い。よしあしごと辨へて、我々〔神々〕の一〔輩〕のごと、成り了せたぞ。さて、この上は、やつが手を伸べ、命の樹の〔果〕まで取り、食らはぬよう！ 〔不死、永遠の命なんぞはやりはしまいぞ〕と。』

(在來の和譯「エホバ神曰たまひけるは視よ夫人我等の一の如くなりて善惡を益る然れば恐くは彼其手を舒べ生命の樹の菓實をも取りて食ひ無限生んと」)

附註。

この一節は、在來、總ての舊約學家がなせる如く、一般ヤグイスト中に納めて、何の不思議もなく、J(一般ヤグイスト)の筆となすことは出來ぬ。この一節は一般ヤグイストと確然、正反對な、獨自な内容を有する。余が、この一節について一般ヤグイストと獨立な一小史料を憶説する理由はこゝに存する。

即ち一般ヤグイストによれば木の實を食ふは恥づべき惡である。(1) 食ふ時は人、死す。(2) 故に神は人を愛して食ふを禁じた。(3)

最古のヤグイスト(J*)

(1). 3, 8.
(2). 3, 3.
(3). 3, 13, 11.

イヴが食ふたのも悪と知りつゝも罪と恐れつゝも蛇の誘惑にまけて食ふたのである。(1)

然るに、この一節(2)によるに木の實を食へば人死すに非ず、食へば人生く、限り無く生くるのである。木の實を食へば不老不死となるのである。夫故、この實を食ふことは、恥づべき悪ではない。長壽延命は當然の人の望みである。不老不死は上古の人心を、いかにか、そそつたであらう。上古の神さへ、あまりの美果を人が納め全然神と同一となるを嫉んで人、これを嗜まぬ様心したのであると傳へて居るのがこのJ*三ノニの物語である。Jの神の如く人を愛して禁じたのでなく人を嫉みにくんで、これを食ふを防げんとしたのが三ノニのこの物語である。三ノニは、かくJ(一般ヤヅイスト)と正反對な内容を有する。

三ノニはJと獨立した獨自な一小史料をなすものである。但し三ノニとてもJの記事中にあり *Salve* を神名とする。

(1). 3, 13.
(2). J* 3, 22.
(3). J 3, 3.
(4). J 3, 8.
(5). J 3, 1, 3, 11.

これ、余が三ノニを、最古のヤヅイストJ*と考ふる所以である。ヤヅイスト中にあつて而も、一般ヤヅイストJと獨自な、最古のヤヅイストとする所以である。

創世記六ノ一、一三、……(神孫と人間の娘共と夫婦になる)

一、(下界)地上で人間がだんだん數を増し加へて來て、娘共も出來てきました。二、すると神孫達がその人間の娘共を見て、誠にこれは美しいと、それぞれ好み好みの女を娶つて自分等の妻としました。三、その時、ヤーウエは申されました。『あれは肉なのだもの。わが靈は人間などを相手には争ふまい。然し、やつ等の壽命は百二十歳としてしまはふ』と。

附註。

附註して結論のみをあげる。普通六ノ一、一四、をJとする。なるほど六ノ四は六ノ五以下のJと異なる。然し、六ノ四は一、一三、とも異なる！余は六ノ四をJと考へ、六ノ一、一三、を更に古いJ*とする。

最古のヤヅイスト(J*)

創世記一一ノ一、一九、……—「バベルの塔」—

一、地上、總てが〔まだ〕ほんの二ことばであつた時、人々、東に出て立つて、シヌアールといふ土地に、とある平野を見つげ出し、そこに一と先づ居を定めました。二その時、お互、「ひとつ、瓦を造つて、堅く焼かう」と云ひ合つて〔瓦を焼きました〕。三、焼きました〔瓦は建物石の代用をするのでした〕。——丁度ヘーメル〔土脂〕がホーメル〔漆灰〕に代り合ひます様に。四、さて、〔これで〕ひとつ、名をあげてやりませう。町を一つ、それから、天までとどく塔を一つ築いて。みんなが地上、一面に散れないやうに、とさう、みんなが云ひだしました。五、處が、ヤーウエは、〔天から〕おりて来て、人間どもが築いた塔と町とを見ました。六、これはしたり。やつ等は、ほんの、ひとことばだつたものだから、〔話し合つて〕こんなことをしはじめた。これから、また、どんなことをやりだしても、とめることが出来なくなつてしまふ。七、さあ、ひとつ、降りて来て、こゝのことはを亂してやつて、お互話しあひの出来ない様にしてや

りませう」とおほせになつて、八、ヤーウエは、町を造ることを思ひ断つ様に、みんなをそこから地上、一面に散らしてしまひました。

九、ヤーウエが地上、一面のことはを、そこでバラリ亂し〔balal〕ましたから、そこを、それ故バベル〔Babel〕と名づけました。

創世記三二ノ二五、二六、二八、二九、……—「ヤコブノ角力」—

二五、然し、ヤコブだけ一人、〔ヤボク河の渡しを渡らずに〕のこつて居りました。そうして〔翌朝、あけあがるまで、ひとりの男とやぼく角力をとつて居りました〕。〔yalkok……ye'ahkek〕。二六、その男は自分がかはないと見たものですから、ヤコブの腰のれかがみのところをぶちました。ヤコブの腰のれかがみは、やぼく、この男と角力とつたのでくちいたのです。

〔E、二七〕さあ、放しておくれ、もう朝もあけあがつてしまつたから、その男が云ふのです。然し、ヤコブは「なゝに、放すものか、おれを祝福しないうちは放しはしないぞ」とさう云ふのです。

二八(すると、其の男が尋ねました)。「お前は一體何と云ふ名だ」。

「ヤコブさ」と答へました」。

二九(すると、その男がまた申しますには)「ヤコブなんて、もう、お前の名にはしないが、い。イスラエルさ。人と、エル(神)とに、い。そ。ら。う(競)て、お前が勝つたのだもの」。

附註。

かけことば

yisra'el.....yisra + 'el

イスラエル.....いそらふ+エル(神)

本論 最古のヤウイスト(J)と

メシア思想

—ヤコブ型の利福思想—

「最古のヤウイスト」が傳へて居る物語は以上の序説に全部試譯して其の内容を示した。さて、夫等の物語のうち、含まれた思想は如何なる思想であらう。否、抑も如何なる人ごころが凝つて夫等の物語と現れ來つたものであらう。その思想、その欲求は、福祉(獨、Ere)を欲する欲求と、それが産んだメシアの信仰とどう關係するであらう。

「最古のヤウイスト」の夫等の物語のうちに潜む欲求——否、その欲求がもとになつて夫等の物語が案じ出されて居るのだらうと思はれる——その欲求は、福を求めて、とめどもなく大きい。各自が、自己の幸福を欲して限り知らず大きい。バベルの塔の物語に於て、町を一つ造つて、自分等が皆、一所に居り、地上、一面に

「最古のヤウイスト」の利福欲

最古のヤウイスト(J)

散らぬ様、望んだのは、まだ消極的な控へ目な望みであるが、塔を一つ築いて天下に名をなさうとした欲望は、上代の人の望みとしては可成り目に立つ。然し、塔の頂を高うして神の御座所たる天を摩せんとした其の望みは越ゆるものなく大きい利福欲である。(1)

さればこそ、人は、よしあしごとと總てを辨へて、此の上は不老不死の靈果を得、永遠の命を身にして、神々たらんと欲するものと神ヤーウエによつて氣づかはれて居る(2)と物語つて居る。

「最古のヤヅイスト」の望みは天にも至らねばやまぬ望みである。實に身の幸ちを求めて神にも至らねばやまぬ利福欲が、人と神との間の此等、最古のヤヅイストの物語を創つたのである。

かく、「最古のヤヅイスト」の物語は、人がとめどもない利福欲の持主であることを示すばかりでなく、人は元來神に遠くないものであり、その利福欲を以て、神と争ひ、時には神をさへ負かしたといふ物語を傳へて居る。

物語に出て居る神は人のなかに混り、人と角力をとつてくれる神であるが、然

二、利福欲
求の物語

神人互角

し、事程、近い、親しい神であると見るのは、近代人の眼を以て見る見方で、物語自身の心とは異ふ。なるほど、物語の神は人に近い。然し、親しくはないのである。

神は人に近い。人が塔を築いたと云へば、わざわざ天から降りて来て見る神である。(3) おりて来て、人のなかに這入つて来て、人のことばを亂して歸る神である。(4)

人も、また、神に近い。人の娘共は神孫(後述)の處に嫁に行つて居る。(5) 神からも、人間は「よしあしごとと辨へて、我々(神々)の一のごと、成り了せたぞ」と云はれて居る。(6)

神は人に近く、人は神に近い。神、人、相隔たる僅かに一步である。人は已に萬事を辨へて神の如くである。この上、人が不老不死の樹の實でも手切つて、食へて、永遠の命なぞを得たら、神そのものになつて了ふと案せられて居る。(7) 神、人は正に互角の位置にある。そこで、

神は人を服さんとして居る。人が命の樹を奪取せぬ様、心がまへして居る。(8) 人が復た、打合せて町なぞを建設せぬ様、神が先きへ廻つて、人のことばを亂さんとして居る。(9)

最古のヤヅイスト(J*)

(1). 11, 5.
(2). 11, 7.
(3). 6, 2.
(4). 3, 22.
(5). 3, 22.

(6). 3, 22.
(7). 11, 7.

(1). 11, 4参照.
(2). 3, 22.

神、人の争
闘

人も亦、神を服さんとして居る。神を負かさうとして、ヤコブは夜中、ヤボクの河の主かと思はれる神と角力取つて居る。(1) 神を服さんとして、人は、御座所にとどく塔を築いて居る。(2)

正に、それは、神、人の争闘である。欲の衝突である。自己を榮えしめんとの欲求、—— 利福の欲の衝突である。

争闘の結果は、多くの場合、神の勝利に歸して居る。人間の敗北が物語られて居る。人は遂に不死の木の實を嗜み得ず、百二十歳と壽命を限らるるに至つたとあり、人はことばを亂され、すまゐを散らされたど物語られて居る。神、勝ち、人、敗るるのが常であつた。

ひとり、ヤコブは神に勝つた。勝つたヤコブには神から、エール(神)にいそらへ(競)るイスラエル⁽³⁾てふ名譽の稱呼をさへ奉られたと云ふ。(4) 後の史料Eは彼れがその神に祝福を迫つて遂にそれを贏ち得たと云ふ傳説さへ傳へて居る。

かう、物語を究め來つた時、吾人は只々、驚異するのである。所謂セム系の宗教、とりわけイスラエル人の信仰にも、その昔はかうした宗教があつたのかと只管

勝敗

神に勝てる
ヤコブ

三、物語の
特異性

(1). 32, 25.
(2). 11, 4.
(3). 3, 22. 参照.
(4). 6, 3.
(5). 11, 8, 9.

(6). 32, 26, 29.
(7). 32, 27, 30.

に驚異するのである。イスラエル人の信仰とし云へば、例へば獨子イサクを神に献げ、火に焼き果さんとしたアブラハムのその様に、神を恐れて何物もない…… 畏るるは神を知るの初めであり、終りであつたその信仰、神を恐れて、他神なく、偶像なき法 *Yahweh* の宗教、神を恐れずしては國も亡ぶ、民も死ぬと云ふ豫言者の宗教、神を畏れて高く天の御座所に崇めまつた超越的な「雜書」 *Kethubim* のうちにも、かうした一小史料が、その最古時代に存して居つたことを發見して、事の意想外なるに、只管驚異せざるを得ないのである。

この「最古のヤグイスト」の神は、人界を超越した神でないのは勿論、それは人によつて事へられた神でもなく、人によつて恐れられた神でもない。人によつて争はれた神である。人と角力とつて放りだされた神なのである。

神の姿は—— 云ふまでもなく—— 人の心の反映である。人と角力とつた神を描いた人の心は、神と競ふ人心であつた。而して、その心は神と争うてまで贏ち得んとする利福の思ひにもえて居た。

人界を超越
せずして人
と角力とる
神

神を崇めず
神と争ふ人

町を造つて一所に纏らうとしたのも、塔を築いて天下に名をなさうとしたのも、その頂を高うして天にまで至らせようとしたのも、また、不老不死の木の實を嗜うとしたのも皆、それである。

それは、自己を榮えしめんととの心である。福を望む心である。但し、それは、利福欲であつて福祉欲ではない。神にひれふし、ひざまづいて福祉(=Heil)を望む心ではなく、神を振り伏せ、押し仆しても己が幸ち(獨(Chin))を得んとする心である。神の力で自分が祝福されようとして禱り求めるのではない、自己の力で幸福を利得しようとして云ふのである。 titanisch な欲求である。 messianisch な欲求ではない。

欲求の完成者ヤコブは Promethens である。欲望の成就者 Masiah (メシア)ではない。 Heil (福祉)を神のめぐみに望む心の Einbildung (假象)たる Heiland (メシア)ではなく、Glück (幸福)を自らの力に求むる心の(想像)Fantasie—(Jehide)たる Promethens なのである。

物語に生きてゐる力、物語に巢組んだ命は利福欲であつて福祉欲でなく、物語に生きてゐる人物ヤコブはプロメテウスであつて、メシアではない。

福社欲てな
く利福欲
Mesianisch
はたなく
titanisch—
Messianisch
てなく
Promethens
(たるヤコ
ブ)

要するに III 欲は物語「最古のヤグイスト」にない。従つて III 欲の化身

Heiland もかけて居る。あるものは利福欲と、利福欲の戦闘者とのみである。そして戦捷者ヤコブがこの最も好き代表者と思ふ。

故に、私は、かうした宗教思想を假りに名づけて『ヤコブ型の利福思想』と呼びたい。よつて意味せんとするところは、かうである——即ち、神の力にすがり、神に祝福せられて、福祉(=神による自己の榮え)に與からんと福祉欲とその成就者メシアを望み俟つのでなく、それは、あくまで自己の力に頼り、時には神と角力してまで、自己の幸福(=神を問題とせざる自己の榮え)を利得せんととの心である。

かくして「最古のヤグイスト」は Heilsgedanke 並びに Heilandservartung と正反對の地位にある。

但し、「最古のヤグイスト」も Heil と Heiland の思想の正反對なるヤコブ型の利福思想にとゞまらず、メシア型の福祉思想への動向を指し示して居る。

「最古のヤグイスト」は人と神との利福の争ひを物語つて居る。然し、ヤコブの場合を除いて外は悉く人間の敗北屈伏を描き出して居る。福を求めて神と争

最古のヤグイスト(J*)

四、ヤコブ
型の利福
思想

五、最古ヤ
グイスト
の思想動
向——利
福社への
ヤコブ型
メシアよ
り。

うた者の失敗を語る物語は、やがて神にひれふして福祉に與からうとする次ぎの時代の宗教思想を産み出す胎とも見られる。

物語の神は曰ふ、あれ(人間)は肉なのだもの。わが靈は人間などを相手に争ふまいと。神は人間との大人氣もない争ひを争はず、自ら高くとまらんとして居る。高き神に頼つて福祉にあづからうとする次期の宗教心は既に暗示されて居るのである。

總説

要するに「最古のヤヅイスト」は利福のための神と人との争ひを物語つたものである。それは、神と取組み、神を振ぢ、伏せ己れに利福を納めたる戦捷者ヤコブをさへ描き出して居る。それは、神によつて福祉の與けられんことを希ひ、メシアによつて福祉の齎されんことを俟つ宗教心とは、全然、正反對である。神は低くして人と對峙し、人は高うして神と拮抗し、相争うて人、神に勝ち、己れを榮えしめ、利福を納むる「ヤコブ型の利福思想こそ、最古のヤヅイスト」の宗教思想なので

ある。

但し、物語にあつて、人は——ヤコブの外——悉く争闘に敗れ、神は既に争ひを斷つて、自らを高うせんと心して居る。高められた神に、自らを低うし、ひれふして福祉を望む次期の望みは既に暗示されて、イスラエル宗教思想の動向は、已にその最古のあらはれのうちに自ら明らかなのである。

後代のホセアは云ふ

ヤーウエは、ヤコブを、その途に従ひて罰し、
その行ひに従ひて報い給ふ。
ヤコブは胎にゐし時、その兄弟の踵を捉へ、
己が力もて神と角力争へり。

ホセア 一一ノ二、三、

第一編 過去のメシア

第一部 ヤヴイスト(J)のメシア思想

序

同じヤヴイスト中にあつても、そのうちの獨立小史料「最古のヤヴイスト」には利福欲はあるが、福祉欲がない。従つて福祉欲の假象、メシアは存しない。只、「Titanien」に神と争うた利福欲の戦闘者、否、戦捷者ヤコブが Prometheus の如き姿を現じ出して居るのみである。

要するに、それは利福を神と争ふ「ヤコブ型」の利福思想を命として居る。但しそれとでも、ヤコブの外、多くのものは神に敗れ、神またこれと争ふを止めて自らを高くした物語をも併せ傳へて居る。利福欲から福祉欲へ、ヤコブからメシアへの將來の思想動向は既に「最古のヤヴイスト」中に羅針されて居る。と云ふことに就ては已に述べた。

「最古のヤヴイスト(J*)」が到りついた天地は、「一般ヤヴイスト(J)」であつた。そこ

には唯だ、福祉欲が洋々とたゞへられて居る。福祉は物語に満ち、物語は福祉に充ちて居る。個人の福祉(第一節)が物語られ、子孫、一家(第二節)一族、一國(第三節)の福祉が傳へられて居る。福祉と併せてまた各禍(獨、Dümel)(第四、——六節)も物語られて居る。然し、ヤグイストは夫等の福祉物語 *Heiliges Nichte* (第一章)と共に *Heilandsgeschichte* メシア物語(第二區)をも傳へて正にそれは「過去のメシア」の物語である。

第一章 ヤグイストの福祉物語

第一節 個人の福祉

ヤグイストの福祉欲は様々な個人の福祉を物語つて居る。即ち、それは、神が個人を救拯した話(第一項)福祉を下した話(第二項)個人を嚮導した話 *Gotteshilfen* (第三項)を成して居る。

第一項 個人の救拯 の第一は根本的な救拯で、即ち

A 種の保存となつて現はれて居る。箇々の人間のみでなく、箇々の生物の種の保存となつて現はれて居る。即ち、ヤーウエは洪水の際、鳥と獸とを種切れにせぬ様——種 *Nachkommen* を存続せしめんためノアの方舟に入れしめた(1)と物語られて居る。生物の種の保存であり、生物の根本的救拯である。かうしたヤグイストの神、ヤーウエは、

B 個人を仇から保護し、個人の仇を復仇し給ふ神であると物語られて居る。

第一項
人の救拯
A、種の保
存

B、復仇

(1). 創. 7, 3.

C、脱苦

D、救難

E、保護

F、守護

事程、福祉の神と考へられて居る。カインを保護して、凡そカインを殺すものは七倍の罰をうけん⁽¹⁾とのたまひ、更にレメクを保護して、カインのために七倍の罰あれば、レメクのために七十七倍の罰あらんと⁽²⁾のべられたと云ふ。同様、アブラハムに就ても⁽³⁾ヤコブに就いても⁽⁴⁾彼等を「咀ふものは咀はれん」と語られて居る。

C 豫じめ苦難に備へ、個人を保護された神、ヤールウエは、事實、個人の苦を救うた脱苦の神として描き出されて居る。神ヤールウエは、ヤコブの妻レア⁽⁵⁾及びラケルの子無きなやみを顧み、これに子を給うたと物語られて居る。又、

D ヤールウエは、ソドムの町に住人、ロトをソドムの町の亡滅の危難から救うた救難の神として物語られて居る。⁽⁶⁾

E ヤールウエは人の苦難を救うた神たるのみならず、苦難の人を保護する神として現はれて居る。ヨセフが獄中危難の身であつた間、ヤールウエは常に彼れと共にあつて、彼れを保護し、遂に、彼れを榮えしめたと物語られて居る。⁽⁷⁾

F 實に、神、ヤールウエは、苦難の時も、然らざる時も、偕にあつて、これを守護し、總ての事に於てこれをめぐむ守護の神として考へられて居る。即ちヤールウエはア

(1). 創. 4, 15.
 (2). 創. 4, 24.
 (3). 創. 12, 3.
 (4). 創. 24, 29.
 (5). 創. 29, 32.
 (6). 創. 30, 6.
 (7). 創. 19, 19.
 (8). 創. 39, 2, 3, 21, 23.

第二項
個人への福

ブラハムに對して、「われ汝と共にありて汝を守らん」⁽¹⁾との加護のことばを垂れ、また、實際、總ての事に於て彼れをめぐみ給へる神として傳へられて居る。⁽²⁾ヤールウエは實に、彼れを祝するものを祝し、彼れを呪ふものを呪ふ守護の神と表はされて居る。⁽³⁾

要するにヤールウエは個人の苦難を未然に防ぎ、已然に救ふ救拯の神である。彼れヤールウエによつて、人の禍は轉せられて人の福ひとなつたとヤヅイストは物語る。一體、ヤヅイストは、

第二項 個人の福み自身に就いてかう物語つて居る。即ちイサクは百倍の收穫を得、大なるものとせられ、⁽⁴⁾裕かに福祉に與かつたことは、他國人(ゲラルのアビメーレツク)さへこれを認め、ヤールウエはアベルと其の供物とを顧み、其の恩顧はカインの嫉みを估ふほど著しかつたと物語られて居る。⁽⁵⁾ノアは恩みを得、イサクは祝みをうけ、⁽⁶⁾レアは子福に與かり、⁽⁷⁾ヤコブは榮光を得たりと物語られて居る。⁽⁸⁾

人を救ひ、人を福した神は、又、人を嚮導したと云はれて居る。

(1). 創. 28, 15.
 (2). 創. 24, 1, 26, 3. 前半
 (3). 創. 12, 3, 27, 29.
 (4). 創. 26, 12, 13.
 (5). 創. 26, 28, 29.
 (6). 創. 4, 4. 以下
 (7). 創. 6, 8.
 (8). 創. 26, 12.
 (9). 創. 10, 11, 13.
 (10). 創. 31, 1.

第三項 個人の嚮導。ラバンの許に在つたヤコブにヤールウエは「父の國に歸れ」と命じ、ヤールウエ、ミデアンにてモーセに言ひ給ひけるは、往きてエジプトに歸れ汝の生命をもとめし人は皆死にたりと語られて居り、又アブラハムをして祖國を離れしめたのは神、ヤールウエの嚮導によると語られて居る。

要するに、彼の地に至れ、此の地に生まれと命じ、而も、旅の途上に身の安全を福ひするのはヤールウエである、と物語られて居る。

ヤウイストはかくの如く、個人が神によつて救はれ、福まれ、導かれた個人への福祉を様々に物語つて居る。

福祉はかく其の當人に就いて望まれたばかりでなく子孫一家の上に望まれ實現された、と物語られて居る。

第二節 子孫、一家への福祉

第一項 福祉は子孫、一家の上に望まれた。アブラハムはヤールウエに實子を

(1). 創. 31, 3: 32, 10(和譯九) (6). 創. 32, 10.
(2). 出埃及. 4, 19.
(3). 創. 24, 7, 40, 56.
(4). 創. 12, 1.
(5). 創. 26, 3.

を得て嗣子とせん切なる望みをのべアブラハムの妻、サラは子なきをいとひ、己が侍女を入れても子を得んと欲し、ロトの二人の女は、極悪非道、父を犯してまでも子を得んと欲し、サラは不正にハガルと其の子を逐ひ出して己が實子を嗣子とせんとしたと物語られて居る。強い家族觀念は子寶を切望したのである。父はまた子のため好き嫁の福まれん事を望み、子は、また、速かに一家を成さん事を期して居るのである。

第二項 夫々望みは聽され、子福は授かつたとヤウイストは物語つて居る。

ヤールウエは實に子福を興くる神として描き出されて居る。否、

第三項 子孫は濱の真砂の如く興へられんとアブラハムに就いてもヤコブに就いても云ひなされて居る。そして夫等の子孫には住ふべき地、裕かに興へられ、其の地にはイサクの子孫、ヤコブの子孫殖へ増し、蔓らんとのべられて居る。

第四項 實にヤールウエはイスラエルの民のため一家を福み家を成し興うる神と云はれて居る。

かく、子孫、一家への福祉を物語つたヤウイストは、また、

(1). 創. 15, 3, 4. (6). 創. 30, 30.
(2). 創. 16, 1, 後半. 2. (7). 創. 30, 2.
(3). 創. 19, 30-38. (8). 創. 13, 16.
(4). 創. 21, 8以下. (9). 創. 28, 14, 32, 13.(和譯12.)
(5). 創. 24, (10). 創. 24, 7.
(11). 創. 26, 22.
(12). 創. 28, 14.
(13). 出埃及. 1, 1.

第三節 一族一國への福祉

をも筆にして居る。一族一國に就いても個人と一家とは就いての如く、そこに救拯と福祉とが物語られて居る。

第一項 救

A、神罰を
與へず

A ヤーウエはノアの一族のみは、ノアが其の當時の時人にもまして義しかつたが故に、⁽¹⁾洪水の神罰を脱し給うた⁽²⁾。エジプト全地に神罰として雹を下した際も、たゞイスラエルの民の居つたゴーセンだけは雹を下さず⁽³⁾。エジプトの國の中の長子を塵殺にした時も、イスラエル人の門の前だけは神罰なしに⁽⁴⁾。逾越させたと云はれて居る。ヤーウエはイスラエル人を特に神罰から脱がしたのであると云ふ。——これは思想として所謂 *Restgedanke* 「残存者」思想を表はすものは考へられぬ。然し、物語として、たゞ神罰に處せられなかつた *Reste* (Remnants) 「残存者」に就いて物語つて居るものである。別に、「ヤーウエの日」を思ひ、その日

(1). 創. 7, 1.
(2). 創. 7, 23.
(3). 出埃及. 9, 25.
(4). 出埃及. 12, 23.

B、脱苦

に生き残るものと云ふ意味でないことは明かである。ただ、エジプト人が神罰を蒙つた時イスラエル人は、そば杖を蒙らなかつたと云ふにすぎぬ。尤も、後に神罰の日が考へらるるに至つた時かゝる物語が伏線となつてその神罰の日の「残存者」また「残存者」と然らざるものとが、ふき別けられる「ふきわけの審判」*Tante rüngericht* などの思想が考へらるるに至るものと思ふ。

C、救難

C ヤーウエは、更に、又、救難の神である。彼れは、イスラエルの家の産兒が悉くパロの手によつて殺されんとした時、その危難を、産婆を通して救ひ、⁽¹⁾出埃及に際して追ひ來つたパロの軍勢の難からイスラエルの民を救うたと傳へられて居る。

D、嚮導加護

D 抑も民を嚮導する神はイスラエルの民を苦難、迫害のエジプトの地から導き出し、⁽²⁾晝は雲の柱、夜は火の柱となつて民を嚮導加護し、⁽³⁾

E、聖戰助

E 民のために彼れの戦ひを闘うてこれを助け、⁽⁴⁾イスラエルの民をして、今、我れ

(1). 出埃及. 3, 7. 尚ほ. 出. 12, 30. 創. 16, 11. 參照.
(2). 出. 3, 16. 4, 31.
(3). 出. 1, 20.—22.
(4). 出. 14, 13. 30. 18, 8. 10.
(5). 創. 15, 7.
(6). 出. 3, 8. 12, 31. 18, 1.
(7). 出. 14, 19. 後半. 24.
(8). 出. 14, 14. 25.

知る、エホバは諸の神よりも大なり、彼等(エジプトの民)傲慢を逞しうして事をなせしがエホバかれらに勝てり」と叫ばしめたと記されて居る。——「最古のヤヅイスト」J*の神はイスラエルと戦つて、これに敗れたりして居る。「一般ヤヅイスト」Jの神はイスラエルのために戦つてこれに勝つて居る。——

F 實に、イスラエルの民は、よし苦めらるるとも、神に守られて、苦みのうちにも尙ほ且つ榮えると云はれて居る。

かくの如くヤヅイストは、ノアの一族、また、其の後裔たるイスラエルの國民が、神罰にのこされ、苦難に救はれ、神の嚮導、加護に與かり、聖き戦ひを以て保護助力されたかを物語つて、イスラエルがヤーヅエよりうけた救拯を傳へて居る。故に、イスラエルは苦しみのうちにも、尙ほ、榮えを致し、福みを完うしたと云ふ。

第二項
族一國への
の福みへ

第二項 一國、一族がうけた福みに就いて、ヤヅイストは左の如く物語つて居る。

A 其の民は其の地を與へられ、其の地は廣くせられて、其の民は、其の地にふえまさん⁽⁴⁾而も其の地は特に福まれたる地として、エデンの園の如く、乳と蜜との流る。

るる地である⁽¹⁾と云ふ。

B、民

B 民に就いても、ヤヅイストは、抑も、ノアの三子のうちセムの下に、ハム、ヤベテ隷屬すべく⁽²⁾其の末、アブラハムの下に大國民、生すべく⁽³⁾其の子イサクの双兒、エサウ、ヤコブのうち長子エサウ(エドム民)は却つて末子ヤコブ(イスラエル民)に従ふべく⁽⁴⁾ヤコブの數ある男子のうちこれを導いたのはユダであり⁽⁵⁾最も榮えたのはヨセフであつた然し末子、マナセに就いても、彼れの後胤が一國民をなし、季子エフライムが遂に大國民を致すべき誓ひをうけたことを物語つて居る。

イスラエルの民は、已に、エジプトに居つた時、其の數、多く、其の力、強くエジプト人が彼れ等を苦しむるほど却つて彼等の數は増し、其の力は強くなつてエジプト人の懼れとなつたと物語られて居る。

第三項
福みの確保

第三項 民はその福みを確保されて、洪水、再び來らず、咀ひ再び襲はず、種蒔時と刈入時、夏と冬と、春秋を加へた四季は舊約元來の考へに無い⁽¹⁰⁾は時をたがへずして來る、福みはイスラエルに確保されて居ると語る。

(1). 出. 3, 8.17
 (2). 創. 9, 25.—27.
 (3). 創. 12, 2.
 (4). 創. 25, 23.
 (5). 創. 43.
 (6). 創. 48, 19.
 (7). 出. 1, 8.
 (8). 出. 1, 12.
 (9). 創. 8, 21. 出. 9, 29.
 (10). 創. 8, 21.

(1). 出. 18, 11.
 (2). 出. 1, 12.—14.
 (3). 創. 12, 7, 13, 15.(R.?).17.(R.?). 15,18, 24,7, 28,13.
 (4). 創. 26, 22.
 (5). 創. 13, 10.

要 説(以上三節の)

福祉物語

個人も、その子孫も、一家も、一族も、また、一國も、神に救はれ、福まれ、導かれた。福祉は裕かであつたと物語るのが、ヤグイストである。

福利ならぬ福祉

それは、福ひを欲する心切なる餘り、神とまで利福を争うた、最古のヤグイストの物語と異つて、福ひを欲する心切なるが爲め、神から與かつた福祉を特に感銘してこれを傳へた物語である。

特別な福祉

従つて物語られた福祉は、特別、異常な福祉である。福祉の地は、乳と蜜との流るる地であり、收穫は百倍し、時は違えられずして到り、民は濱の眞砂と殖え増し、神は民のために戦ひ、民は仇の門獲んと云ふ。物語られた福祉は、宛然、メシア時代の福祉であり、物語は、將來の福祉を誓約された過去の福祉の物語である。

福祉の理由無条件

然し、物語は何故、神、ヤールウエが民、イスラエルに福祉を給ふとなして居るか。例へば(後の豫言者が説いた如く)正義の行ひを條件として、神は民に福祉を下

神と民との自然的必然的関係として

すとして居るか。又、例へば(後の申命記法の如く)神法の履行を條件として、福祉を下すとなして居るか。否。物語は福祉にまで、何等の條件を附して居らぬ。それは、福祉が、たゞ、單に、絶対、無條件に下る、また下つたと物語つて居る。

たゞ、神ヤールウエは民イスラエルの神であり——

——民祖、アブラハム、イサク、ヤコブの神であり、汝等の神、汝等の父の神であり、⁽²⁾「へブル人の神であり」⁽³⁾

又、民、イスラエルは神、ヤールウエの民である——

——民は神にとつて「己が民であり民はエジプトの地に於て別れた民であり⁽⁴⁾イスラエル民とエジプト民との區別は大きへこれを辨へて其の舌をこの民には動かさじとさへ云はれた民である。

夫故、神、ヤールウエは民、イスラエルを無條件に守護し、民、イスラエルは、神、ヤールウエに絶対に加護される。

人は自然に、イスラエルに生を得さへすれば神ヤールウエから必然——無条件絶対——守られる。神、ヤールウエは民、イスラエルの「血の夫」である。⁽⁷⁾

(1). 創. 28, 13. 出. 3, 16, 4, 5. (6). 出. 11, 7.
(2). 創. 43, 23. (7). 出. 4, 25.
(3). 出. 3, 18, 5, 3, 9, 1, 13, 10, 3.
(4). 出. 7, 16, 26(創. 8, 1), 8, 16, (和. 26), 19, (和. 23), 9, 1, 13, 10, 3, 12, 31.
(5). 出. 9, 4.

神と民との間には自然的、必然的特殊關係がある。

血を自然的にイスラエルに得たものは、必然的に、その神、ヤハウエから福まれる。福まれた物語が、ヤグイストの福祉物語なのである。

たゞ著しい宗教上及び倫理上の罪を犯した個人は特別除外例として、神罰をうけねばならなかつたことを物語つて居る。個人としては、さうである。然し國としては、神の民、イスラエルに敵するものは、わけもなく罰せられ咎禍(獨、*Unheil*)を蒙つて居る。

第四節 個人への咎禍(Unheil)

第二項 神罰

第二項 神罰。天使に反いたソドムの住民は、神罰として目を眩まされ、アベルを殺したカインは地より逐はれて、さすらひの身と罰せられ、蛇に誘れて、禁せられた木の實を嗜んだエバと其の末とは罰せられて、夫に従ふことと、姪みの苦しみと、勞作のなやみとを與へられ、割禮なきモーゼは殺されんとし、木の實を嗜

(1). 創. 19. 11.
(2). 創. 4. 12.14.16.
(3). 創. 3. 16.18. 5. 29.
(4). 出. 4. 24.

第二項 Ugnade

んだアダム、ソドムの町に住んだロト、地に洩した Onanie の Onan の罪は死に當つたと物語られて居る。

以上特別な罪を理由として除外例の神罰が物語られて居る。

第二項 然し理由もあげられず、たゞ、**恩みにもれて Ugnade を蒙つて居る場合**を語つた物語もある。

カインとアベルとの物語などは、それである。

カインもアベルも共に供物を神に献げた。牧者たるアベルは、羊を、然し農夫たるカインも同様、地の果を神に献げたと云ふ。然るに、神はたゞアベルと其供物とを顧みてカインを無下に排け、其の供物を理もなく拒んだ。その怨恨が遂にカインをしてアベルを殺さしめて居る。……かくして人の子は初めて殺人の大罪を敢へてするに至つたのだと云ふ(あはれなる人の子よ!)……カインは理もなく供物を拒まれ、訴ふべき神もなく、止むなく、恨むべき人を除いて僅に胸の恨みを果たした。が、彼れの神は彼れを呪ひ、彼れの地はまた神に呪はれて、彼れは住まふに地なく、流離の子として野に逐ひやられたと云ふ。

(1). 創. 3. 3.17.
(2). 創. 19. 15.
(3). 創. 38. 9.10.
(4). 尙ほ創. 38. 7参照
(5). 創. 4. 1-12.

(そこには、尙ほ生れながら圻^ヤれを性とせねばならなかつたベレツの物語も傳へられて居る。)

Ungnade
の理由

不正は處罰の標準ではなく——神罰の理由は不義にはなかつたのである。——ヤヅイストは斷じて“Prophetical narrative”ではないのである。たとへ、それが Driver, Introduction to the Literature of the O. T. 1912. p. 117. ff. 等殆ど總ての舊約學者によつて盛に唱へられつゝあるとも。——

ヤヅイストはその理由を擧げて居らぬ。その標準を明かして居らぬ。それは理由がないからではない。理由が記されてないだけである。理由は、當時の讀者、即ち、當時のイスラエル人にとつて、餘りに、自明な理^{ことば}であつたからである。イスラエルは、どうあつても榮えねばならず、カナアン(=カイン)はどうあつても亡びねばならぬと云ふのが理由であつて、それは、記者と讀者との間に特記を要しない自明な制約であつたからである。

ヤヅイストにとつて當然、自然的、必然的に福まるべきイスラエル人が特に罰せられる除外の場合、理由とするところ、宗教上、また、倫理上の特別、著しい犯罪

(1). 創. 38, 28, 29.

行爲による。

ヤヅイストにとつて、然し、當然、罰せらるべきカイン(=Kainiter) ヲ^ンヅ(=Periz-^{iter}) が罰せられて居る、その理由は政治的理由により。彼れがイスラエル以外の民であり、イスラエルの敵である爲めである。と云ふことは、ヤ^ーウエが下した

第五節 國家への咎禍(Ungnade)

を究むる時、一層、明かである。

第一項 イスラエルを去らしめぬ故、エヂプトは神罰をうけた。即ち蛙⁽¹⁾、蝗⁽²⁾、雹⁽³⁾、東風⁽⁴⁾、劍、疫病⁽⁵⁾を以てヤ^ーウエはエヂプトを罰し、また、イスラエルの家子を殺した爲め、エヂプトの家子を殺され⁽⁶⁾サラ故バロの家は罰せられた⁽⁷⁾と傳へて居る。要するに、ヤ^ーウエと其民、イスラエルは義しきもの、バロと其民、エヂプトは義しからぬもの⁽⁸⁾のときめてしまつて居るのである。それがヤヅイストの自他國批

(1). 出. 7, 27前後.
(2). 出. 10, 5前後.
(3). 出. 9, 25以下.
(4). 出. 10, 13, 11, 21後半.
(5). 出. 5, 3, 9, 23.

(6). 出. 11, 4前後 12, 29以下.
(7). 出. 12, 17.
(8). 出. 9, 27.

第一項
のヤ
ブト
ヘ
の神罰

判の標準である。ヤヴイストの自他國物語の前提である。

第二項 自國は義者、夫故、當然、福まるべきもの。これが例へばエヂプト滞在
中また出埃及に際してなやみ苦しんだのは、民がヤーウエを畏れ、其僕モーセを
信するに至るための試煉に過ぎなかつたと云ふ。

要するに、自國は、當然、福まるべきもの、他國は、當然、罰せらるべきものと云ふの
が物語の心である。其の間にあつて義と不義とは何等问题でない。正義は福
祉を條件づけない。尤も、そこに義しきと義しからざるとが唱へられては居る。
然し、それはただ自國を義しとし、他國を義しからずとするものである。否、むし
ろ、自國なるが故に義とし、他國なるが故に義しからずとするものである。正
義は自國を飾るための装ひに過ぎず、不義は他國を蔑む嘲りに過ぎぬ。此に至
つては正義も國家の奴隸である。そして總ての主は邦家の福祉である。⁽¹⁾
無條件に國家の福祉と國民の福祉とを物語つたものがヤヴイストである。

(1). 出. 14, 31.

(2). 國家の問題を殆んど超越した Urgeschichte (創. 1—11)に於て僅かに善惡、
義不義によつて神罰が表はれて居る。人を誘つた蛇は呪はれて土を喰まん
(3, 15.)と云はれ、禁を犯したアダムの罪によつて地は呪はれ(創. 3, 18, 4, 11, 12
5, 29.)人類の惡によつて洪水地に至つた(6, 7, 7, 4, 22, 23.)と物語られて居る。

第二章 ヤヴイストの受福者物語

序

已に究め得た様に、ヤヴイストの物語は福祉欲を以て歴史を見、而してそれを
物語つたものである。過去の歴史は、要するに、福祉の歴史であつたと云ふこと
を唱へた物語である。而も、記者(ヤヴイスト)により、こ描き出された福祉は記者
が考へ得る最高、至大な福祉であつて、讀者には宛然メシア時代の福祉たる實を
示して居るのである。かくて自分等の過去は、かくも特別な、メシア時代的な福
祉を授けられた——又は授けらるべく誓約された光榮ある過去であると云ふ
ことを物語つたものである。

然し、過去を特別福祉の歴史として物語つて居るヤヴイストは、また過去の人
物を特別福祉の人物——即ち特に福祉に授つた人物又は其者に特別、至上の福
祉が誓約された人物として物語つて居る。

處で特別、至上の福祉の人物は、即ち、メシアである。夫故、ヤグイストは實に過去の人物をメシアとして傳へた物語である。「過去のメシア」の物語なのである。以下にヤグイストが如何様に過去の人物を物語つて居るか、ヤグイストの物語つた「過去のメシア」の性質、内容は如何様であるかを究めたいと思ふ。

第一節 生誕

特別なる過去の人物、受福者の生誕は、宛然、メシアの聖誕の様に物語られて居る。

そこには特別な生誕、特別な福祉を示す生誕が物語られて、特別な受福者の生涯の第一頁を福祉もて飾らんとして居る。

A 其の母は子無きものであつたのが特に神から福まれて子を得た、かくして生れたのが即ち受福者であると物語られて居る。それは「處女の聖誕」ではない、然し「石女の聖誕」である。特別な神の恩恵なくしては産み得なかつた其母が、直接

A、石女の
聖誕

(1). 創. 25, 21, 29, 31.

B、老女の
誕

福みの神によつて産みおとした子が即ち特殊な人物、受福者である。夫故、彼れは云はば人の子ではなくて、神の子——神の申し子である。神によつて得たる子である(1)と物語られて居る。

B 過去人物潤飾の同じ *Mohiv* は老女の聖誕となつても表はれて居る。イサクの生誕にこれを見る。即ち、アブラハムに天使が現はれて明くる年の今頃、汝の妻に男の子あらんと云つた時、アブラハムは「九十九歳の²⁶⁵ P」高齡に達して居り、サラには婦人の常の經、已に、息んで居つた。夫故、サラも心に咽うて、「我は衰へ我が主も亦、老いたる後なれば我に樂しみあるべけんや」と述べたと云ふ。然るに明くる年、これに一子が生れた。それがイサクであると物語る(2)。

正に、これ、考いたる處女の聖誕である。老いたるサラの *virgin birth* である。そして産れたのはイエスならぬイサクである。

聖き受福者は産れからして神によつて聖く産れたものであると、過去の人物を福祉的に潤色したヤグイストの潤色は、また他の形をとつても表はされて居る。

(1). 創. 4, 1, 25, 17, 2.
(2). 創. 18, 10-14.

C、胎内の時特異

C 即ちヤコブに就いては彼れが胎内に居る時、已に兄、エサウ(ヤコブとエサウは双兒)と角力とつて、踵を把んでこれを負かしたと物語られて居る⁽¹⁾。

D、出産の時特異

D 同様な潤色法から咎禍者ベレヅは、胎内を出づる時已に折⁽²⁾り出づるものであつたと云はれて居る。

要約

宿つたのも、胎内に於ても、出産に際しても皆、悉く特異であつたことを物語つて居るのである。

第二節 人物

已に生誕からして特別な福祉を示して特異であつたかの如く潤飾されて居る「過去のメシア」も、然し、人物に於ては、強ち、メシア的にのみ潤飾されては居らぬ。

即ちモーセの如きも「言辭に敏き人」でなく、「口重く、舌重き」人物であつた⁽³⁾、加之、彼れは「割禮なき爲め」神によつて殺されんとまでした⁽⁴⁾と物語られて居る。

安からざる人

美の人

然し、アブラハムの妻、サラ⁽¹⁾、イサクの妻、リベカ⁽²⁾は特別、美貌な佳人であり、ヨセフも亦、特に美はしい容姿を備へた男性⁽³⁾として、共に、身邊に多くのローマンズの渦を卷かせた當の主人公と物語られて居る。

信の人

又信仰に於て勇ましく獨子をさへ神に献げて惜しみなかつたアブラハム⁽⁴⁾は信仰によつて義とせられた人物と描き出されて居る。

義の人

ノアも、時人のうち最も義しかつた人物と物語られて居るのである。

ヤヅイストは「過去のメシア」の人物を描き出して世の常ならぬ優れた人物として居る。然し、それは徹底して居らぬ。先にしめしたモーセの場合の如く完からざる人としてさへ表はれて居る。

第三節 福まれたる者

「過去のメシア」は自身の人物に於てはかくの如く極めて不完全であつた。然し、福まれた人としては實に完全に完全に物語られて居る(物語の究竟目的が福祉欲の

(1). 創. 12, 11, 14. (6). 創. 7, 1.
(2). 創. 24, 16.
(3). 創. 39, 6.
(4). 創. 22, 12.
(5). 創. 15, 6.

(1). 創. 25, 21-26.
(2). 創. 38, 26-30.
(3). 出. 4, 10-13.
(4). 出. 4, 24.

肯定成就を物語らんとするにあつただけに)

アブラハムには當然、福みが來らねばならなかつたのであると云ふことは創
二四の物語に明かである。

アブラハムには神、常に偕にまし彼れはまた常に神に事へてモーセ同様神の
僕と云はれて居る。(4) イサクに就いても同様、神偕に在し、彼れを福むと物語られ
て居り、ヤコブも、兄、エサウから福みを奪ひとつた特別な受福者として描き出さ
れて居る。(5) 神は常に彼れと偕なり、福祉は常に彼れに裕かであつた。夫故、後代
に於てさへ神を呼ぶにアブラハムの神、イサクの神、ヤコブの神てふ呼稱を以て
した位であつた。(7)

此等三祖の外、ヨセフに就いても神、常に偕なり給うて、彼れは遂に「さかゆる者」
となつたと云はれて居る。(8)

ノアもアブラハムの如く福まれしものとして物語られ、モーセも神によつて
導かれ、エジプトから民を導き出したものであり、奇蹟を示し得る人として物語
られて居る。即ち、モーセ、杖をあぐればイスラエル勝ち、杖をさぐればアマレク

當然の福み
の人
神偕なるも
神の僕

さかゆる者

導びかれし
もの

奇蹟の人

神の福みの
力にあらざ

要説(第二、
三節)

勝つて語られて居る。但し、われは何事をもなすを得ず、只神のみこれを能くし
給ふと彼れについてヤヅイストは語つて居る。(9)

ヤヅイストの筆になる「過去のメシア」は、人として不完全な人物であつた。(10) 然
し、福まれた人として、神から總てをさづけられて、彼等は「過去のメシア」だつたの
である。他を福ひする能をさへさづけられて、彼れは眞に「過去のメシア」だつた
のである。

第四節 他を福ひする者

福祉欲を心にして、過去を通觀し、通觀した處を物語つたヤヅイストは、過去の
優れた人傑を、福祉の優れた人傑として物語つた。福祉の優れた人傑として夫
等の者は、自身への優れた福祉を示して「福まれたるもの」である、と同時に他への
優れた福祉をも示して「他を福ひするもの」であつた。夫等「福ひするもの」は——
他を救ひ、或は、他を榮えに導くものとして物語られて居る。

(1). 出. 17, 11.
(2). 創. 27, 37. 参照

(1). (殊に7, 12, 40, 56.) (6). 創. 7; 35, 36, 尙25. も参照
(2). 創. 28, 15. (7). 出. 4, 5等.
(3). ヨシエア評. 1, 7. (8). 創. 39, 23, 21, 23.
(4). 創. 26, 24. (9). 創. 24, 28, 29.
(5). 創. 26, 24. (10). 創. 6, 8.

第一項 他を救うた物語としては、ヨセフを救うたユダ、ルーベンの物語があり、また、イスラエル全民を苦難のエジプトから救ひ出し、導き出したモーセについては今更、言ふを要せない。

ノア(Noh)は人類を勞苦と勞作とからのがれしむる慰籍者Nah(Naham)であるとのべられて居る。(3) また、ロトの願ひはゾアルの町を救つたとある。過去の福まれたる人傑は、明かに、過去の教主、過去のメシアとして物語られて居るのである。

と云うて然し吾人は他の總ての宗教事情、文化程度を忘れて、ひた走りに走つて「過去のメシア」を、全然クリストと同じ地位に高め考へんとするものではない例へば、出、四、二一の物語と出、一七、九、二二(E)に於ける物語とを併せ考へる時、モーセが手にした「神の杖」も、亦、殆ど「過去のメシア」の一として顧みざる可からざるを想ふのである。「神の杖」には神の福みこも、「神の(救ひの)力」こもるとするのである。

(申命記法を制定して異教の宗教習俗(魔法魔術等)からイスラエルを潔めたところの)ヨリア王の宗儀改革以前のヤグイスト當時の宗教事情として、ヤグイス

トは、モーセと共にモーセの杖にまで特別福祉の地位を與へて居るのである。そして、それは Fetichism (咒物崇拜)乃至 Magic (魔術)の文化程度を示して居るものと見ねばなるまいと考へる。

ともあれ、特別福祉の人傑が、他人にまでの特別福祉をも、己が身に兼ね與へられて、正に「過去のメシア」であつたことは確かである。と云ふことは、如上、彼等、人傑が他人を救うたと云ふ物語に於ても現はれて居る。が、然し、尙ほ、彼等が。

第二項 他人を榮えに導いたことに於ても現はれて居る。ヨセフ故エジプトの地は福まれて榮えを得(1) ヨセフ故ラバンの家は榮えた(2)と物語られて居る。又、ヤコブはアブラハムに曰うて

「我れ汝を大なる國民と成し、汝を祝み、汝の名を大ならしめん、汝は福祉の基となるべし、我は汝を祝するものを祝し、汝を詛ふものを詛はん、天下の諸のやからは汝によりて福祉を得ん」と。(3)

アブラハムは殆ど完全なる過去のメシアである。

尙、イサク及びヤコブについても同様なことばが云はれて居る。(4)

(1). 創. 93, 5, 47, 15.
(2). 創. 30, 27, 30.
(3). 創. 12, 2, 3.
(4). 創. 25, 23, 26, 24, 28, 29, 27, 29, 33, 13, 14. 其他創. 48, 19. 参照

(1). 創. 44, 33, 43, 3以下, 44, 18—31, 46, 28.
(2). 創. 37, 21.
(3). 創. 5, 29.
(4). 創. 19, 21. 前後.

此に至つては、過去のメシアも、在世當時手近かの友と民とを救ひ又榮えしめ
た。過去のメシアたるのみならず、將來の民のためにも福祉の基を礎ゑ與へた。過
去のメシアなのである。

尤も、それは、未だ到らざる福祉を、未だ現はれざるメシアが齎し與ると俟つ
「未來のメシア」の期俟！ではない。

が、然し、それは未だ到らざる福祉をも、已に現はれたメシアが備へて置いて呉
れたと云ふ「過去のメシア」の物語である。

そこには已に現はれた「過去のメシア」を物語るのと、未だ現はれざる「未來のメ
シア」を期俟して必ず己が身に福祉來ると福待つ心と、「過去のメシア」に期俟して
必ず己が身に福祉來ると福待つ心と、メシアをあてに、福待つ心に違ひはない。

附記 「過去のメシア」の御利益を説いたヤヴイスト本來の筆に加筆したR(結
集者)は更にこれをひきのばして「過去のメシア」の子孫の御利益にまで説き及
ぼして居る。創二二ノ四(註一八)がそれである。創二八ノ二に「及び汝の子孫」と云ふ
一句を挿入したのも同じRの筆である。

過去のメシ
アと未來の
メシアとの
その心形

Jは、民祖が「過去のメシア」として子孫をも福ひすることをのべた(子孫が民
祖の餘慶に與ることを説いた)

Rは、民祖は勿論、民祖の子孫までが、自身「過去のメシア」として他人をも福ひ
することをのべた(子孫が民祖の御蔭で福ひに與ると云ふのではなく、子孫自
身が他を利益する「過去のメシア」であると説いたのである)

Jは「過去のメシア」を民祖等に限り、Rは「過去のメシア」を民祖等の子孫まで
でも引き延ばして、民祖の子孫までが自身「過去のメシア」であつたことを主張
したのである。範圍擴張である。「過去のメシア」の *Verwirklichung* である。

總 說

神が國民の上に、下した福祉の過去を明かならしめんとした歴史物語が即ち
ヤヴイストである。

神が國民——國民の各自各部屬並びに全般——個人と、その子孫とその一家と、そ

ヤヴイスト
の物語

(1) R=Reaktor.

の一族と、國家——即ち國民の上に、
下した福祉——消極的の福祉即ち危難からの救ひと、積極的の福祉即ち泰きが
上の榮えと——

を明かにした歴史物語が即ちヤグイストである。

救ひと榮え、即ち福祉をイスラエルのために見守つた大神ヤーウエは正にそ
の民の守護神である。

彼れは、その民を守つた。守つて福祉を與へた。そして、與へられた福祉は、宛
然、メシア時代の福祉である。

然し、その民ならぬ異邦民が與へられたものは、神罰と、福みにもるる *Ungnade*
との咎禍 *Unheil* であつた。

福祉の理由

何故、然し、その民は福まれ、他の民は禍ひされたのであらう。

物語は何等、理由とするところをあげて居らぬ。

理由とするところは、その民はその神の民であり、その神はその民の神であつ
て、そこには神と民との間に裁つても裁れぬ自然的、必然的、特殊關係が存すると

自然的必然
特殊關係

したところにある。

この(福禍の)理由が物語にあげられて居らぬ理由は、それが記者と讀者、即ちヤ
グイストと民衆との間に、特記を要せないほど、自明であつた爲めであらう。そ
の點について未だ何等の問題がなかつた爲めであらう。

——この點(神と民との特殊關係)が初めて問題となつたのは豫言者に於てで
ある。初めて問題が起つた時は、また、初めて問題が解釋された時であつた。豫
言者は、それ(神民特殊關係)が正義を條件としてのみ成立し得ると、解釋した。後
また申命記法は、それが法の履行を條件としてのみ可能であることを説いた。
然し、豫言者より以前の——勿論申命記法より遙か以前の、ヤグイストにとつて
それ(神民特殊關係)は問題ではなかつたのである。自明であつたのである。特
記の必要はなかつたのである。神の福祉は、その民の上に、問題なく、無條件、絶對
に與へらるべきであつた。咎禍は、他國民なれば理もなく受くべきであつたイ
スラエルの民が苦しみにあふ場合は、只、神の試煉のため、民の一人が神罰にあふ
場合は、其者が特別な著しい不義を犯した除外例の場合のみであつた。

過去のメシア

「過去のメシア」と「未来のメシア」と

さて、その福禍は民の上に如何様に下つた。
 要するに、ヤヅイストは福祉欲の目を見張らせて民の過去に眺め入つた歴史物語である。夫故、民の福ひは過去の至る角々から探し求められて歴史の明るみへ搬び出されて、歴史物語のうちに物語られて居る。他の民の禍ひについても同様である。福祉と咎禍とは一般の過去の上に満遍なく物語られて居る。但し、歴史の上に優れた人物にはまた優れた福祉が附せられて居る。特に民の歴史の首頭を飾る民祖、アブラハム、イサク、ヤコブは至上の福祉をもつて飾られて居る。彼等は福まれたものであつたばかりでなく、他をも福ひするほど神の福祉に豊かであつたと物語られて居る。他をも福むものとして彼等は宛然メシアであつた。確に「過去のメシア」であつた(彼等に就いてはメシア同様、聖誕の物語さへ附せられて居る)

それは物語られた「過去のメシア」であつた。期俟された「未来のメシア」ではない。
 然し、將來の福祉までも過去に於て豫じめ備へて(保證して)置いた「過去のメシ

ヤヅイストの心

「ア」であつた。夫故、物語に於ける「過去のメシア」は事實、記者の現在また將來をも福祉するメシアであつた。

記者の福祉欲は、こゝに満足があつた。ヤヅイストが過去を物語つた現在の目的はこゝにあつた。

實に、ヤヅイストは、過去の福祉 Heil と福祉者 Heiland 〓 メシアとを物語つて、現在の福祉欲を肯定し、助長し、確保し、主張したものである。

實にヤヅイストは、心切に、神の福祉による民の榮えと國の榮えとを望み、信じ傳へ、物語つたものである。——過去の民と「過去のメシア」に就いて。

そしてその心の奥には民は、神の民であり、神は民の神である、神ヤーウエと民イスラエルとの間には自然的、必然的、特殊關係があつて存すると云ふことが前提されて居つたのである。

第三章 ヤヴイスト物語中の所謂「メシア」

豫言に就いて

將來、メシア即ちキリストが出現すると云ふことを豫言した所謂メシア豫言(獨 Die Messianis hen Weissagungen)が舊約書のうちにいくらかもあると云はれて居る。ヤヴイストのうちにも夫等所謂メシア豫言が四つも含まれて居ることになつて居る。逐一、研究を深めたい。

第一、創三ノ二四二五

(所謂「第一福音」Protoevangelium)

試譯

(十四節)
(神)ヤールウエが蛇に申されるには

あんなことを

しでかしたから

野の生物いさゝかで

一番御前が誑はれるのさ

腹で歩くのさ

土を喰ふのさ

御前は一生

生きてる間

(十五節)——(意譯)——

御前と、あの女と、

あのすると、御前のするとも

これから先きは

敵同士だ

にらみあいだぞ

〔あげく〕

御前は

頭を

ふみつぶ

される

〔御前は

踵に

くひつく

だけだが〕

わしは仇悪を（直譯）おいてしまつた

御前と

あの女との間に

御前の胤と

あれの胤との

間（を割いて）

かれは

御前の頭を

碎き

御前は

かれの踵を

碎く

以上、試譯した創三（二四二五）について古來様々な學説が並び行はれて居る。第一種はこれを以て Heiland に關するものとし「メシアの豫言」と認めるものであり、第二種は、これを以て Heiland には關はらない然し二三に關するものと解するもの、また、第三種はそれ等の何れにも關しないものとする學説である。

創三ノ二四、二五の研究に際し、先づ此等在來の學說を批評し、最後に余の正しとするところを開陳したい。

第一節 創三ノ二四、二五をメシアの豫言と解する

學說とその批評

「メシア豫言」と解するに至つたもとは舊約の Apocrypha 中の “Die Weisheit Salomonis an die Tyrannen” の二、⁽¹⁾に “Aber durch des Teufels Neid ist der Tod in die Welt kommen” 「悪魔の嫉みよりして此世に死生じたり」とあるところからして、蛇(死を原因した)は、サタンであると云ふ考へになり、それから蛇の頭を砕くエバの後胤と云ふのは、サタンと戦つてこれに勝ち、十字架の上に世の罪に勝ち、サタンを征服したメシア、キリストのことである……従つて創三ノ二四、二五はメシアの豫言であるとしたにある。創めて此の説をなしたものは Ireneus⁽²⁾ である。⁽³⁾ この説が継ぎ継がれて(例へばルツテルも此の説)今日も基督教會一般

(1). (余の所蔵本 1750年の Biblia vertenischet durch D. Mart. Luther Lüneburg MDCL. による。)
 (2). (1202. Bischof Ireneus von Lyon)
 (3). (Contra haereses III, 23).

の正統な傳承となり現在もこの説を信じ、信じて説いて居るものがある。その

第一に數ふべきは Thomson (Prof. of medical Dept. Univ. of N.Y.) である。⁽¹⁾ 蛇の誘ひを「事實」と見、これをいさなりキリストの豫言として居るのである。⁽²⁾

“With the unquestionable fact, therefore, that the physical imagery of this account was chosen to be suggestive wholly of spiritual truths, we can the better perceive the full meaning of that utterance which the Church has so uniformly interpreted as the first intimation of Christ” p. 89.

そこに蛇の誘ひを “the unquestionable fact” と見て、何の問題もないふれこみの “The Great Argument” に接することは出来ない。そこはたゞ信仰の告白、信仰の主張のみである。

信仰のみの眞摯の前に吾人はこゝに批評を慎まう。

(1). (Wm. H. Thomoon: “Christ in the O. T. or the great Argument” N. Y. 1984. P. 80—95)
 (2). 殊に 89. 90頁

第二 「メシアの豫言」と認めるものの第二は Böhl (Prof. an d. Univ. zu Wien) である。(1)

彼れは四五、四六頁に曰ふ。

「人類の墮落」に次いで出て来る——この一人の救主についての誓約のことばを、不確實極まるものであるなどは、以ての外である。全然、教育の方法を心得ぬものの言である。教主に對する信仰は、人類が永い進化と久しい教育との後初めて到りつくべき結果ではない。それは、教育と進化とのいやさきに、先づ礎をおかすべき第一の基礎なのである。夫故、吾人は、むしろ、逆に、——全舊約を通じて、第一福音ほど、總てを包括し、總てを要約した誓約のことばは、またと見出し得ぬと言はねばならぬ。救ひに關する最初の表現として、それは不確實極まるものなぞではあり得ないのである。

と。進化を無視し、これを排け、むしろ退化を説かんとして居る。そう云ふものであらうか。一般の進化を云々すべくこゝは其の場所でない。只だ、メシアの

第一論點
三ノ一四、一五
解釋の根本
思想

余の考へ

思想がイスラエルに於て漸次に進化して行つたと云ふことは吾人が明かに究め得、確かに主張し得るところである。この論文、全體はそれを示す。

尙ほ Böhl は細論して、「蛇」と女のする(胤)とを左の如く解いて居る。

「蛇」を解して蛇自體 („eine natürliche Kohnunge“) のみでない云つて居る。神が死を以て禁めたその樹の果を嗜めなぞと誘ふものは單なる動物ではあり得ない。それは „ein ganz eminenter Feind Gottes“ (まがふべくもない神の敵) のみ敢てなし得るのである。 „Nur ein Satan wagte es“ (ただサタンのみ敢てし得) と云つて居る。 „Zu diesem ganz durchsichtigen Worte „Satan“ bildet nun unsere Erzählung den trefflichsten „Commentar.“ (全然透明なる一語「サタン」のみ問題の物語について、適切無比なる註解を與ふるものである。) とさへ主張して居る(五一頁)

然し、余は、著者に反問したい。サタンなるものはバビロニア捕囚後、初めてイスラエル宗教思想史に表はれ來つたものではないか。捕囚末期、イスラエル人がペルシャ人に接してその宗教にふれ、神人中間物(獨 Mittelwesen)の信仰を得、そ

第二論點
三ノ一四、一五
に出づる蛇
はサタンな
りし Prof.
Böhl は云ふ

批評
蛇をサタン
と解し得ず

(1). (Eduard Böhl: „Christologie des A. T. oder Auslegung der wichtigsten mess. Weissagungen“ Wien 1882 S. 43—72.)

して歸國後、間もなく現はれたゼカルヤがサタンなるものをイスラエルの宗教思想に植ゑつけたのであると余は考へる。(第一)サタンと云ふ言葉は舊約書中ザカルヤ書に初めて出て居る。(第二)サタンと云ふ言葉はザカルヤ書に於ては冠詞(He)を持つた普通名詞 *ha'satan* (*der Widersacher* つむじまがり)であつて冠詞なしの固有名 *satán* (*Satan*「サタン」)——丁度、アラビヤ人の所謂シャイターン *shaytan* の様に——ではない。

ザカルヤ書では、それは、まだ、サタンと云ふ固有名で呼ばれる悪魔ではなくて、只、單に神前の裁判に検事役として出てくる「邪魔者」つむじまがり「あまのじやく」*der Widersacher* に過ぎないのである。

夫故、ザカルヤ書に於てさへ、サタンてふ言葉並びに思想は未だしいのである。後にサタンとなるべきものが一寸、顔を出して居るに過ぎぬ。

捕囚後(五二〇——五一八年)のザカルヤに於てさへ未だしいサタンてふ言葉及び思想の *„der trefflichste Kommentar“* (適切無比なる註解)を捕囚前(八五〇年頃)のヤヅイストに求めやうとする *Prof. Böhl* は餘りの時代錯誤に陥つて居られる

しまいか。

余は蛇をサタンと解する *Prof. Böhl* の説に従ひ得ぬ。

Prof. Böhl は曰ふ。

胤 *zara'* は箇的にも解し得(例へば創四^{二五})また集会的にも解し得る語である。——夫れは正しい。

が、更に曰ふ。

處で、三^{二五}の胤は箇的に解すべきだ。

但し、こゝに所謂胤^胤は、一個人を意味せねばならぬ。……「かれは汝の

頭を碎^碎くてふ最後の一句に於て胤^胤は確に個人格を意味する。」と。

成程「かれは御前の頭を(ふんづけ)碎き」の「かれ」^胤は單數である。複數 *hemah* ではない。然し、集合體の内から撰卓なしにとられた個人であつて、不定である。

特に撰び出された個人 *キリスト* でない。と云ふことは、こゝに撰卓に就いての特記がなく、特に此の個人を指すと云ふ附記もないことによつても知れると思ふ。

第三論點——胤^胤は ein Judäer だんをいふのや Collee tivum にはなるといふ Prof. Böhl の説

批評

又、抑もヤグイストの性質を考へる事、過去の優れた人物を福祉の優れた人物
 『メシアと福祉化したのがヤグイストである。夫故ヤグイストには、過去のメ
 シア』はある。が「未來のメシア」はないと云ふ事に就いては已に詳にした。
 この『かれ』を、特に撰んだ個人と解し、『かれ』を「未來のメシア」と解するのは、全然
 無理である。ヤグイスト一般の思想を顧みぬ人の言であるとしてより外考へられ
 ぬ。

又、こゝに意味する女はエバであり、女の〔後胤〕は人間を一般にさすのであるこ
 とは同じ章の二十節にエバは總ての人類の母であると云つたのによつても知
 られると思ふ。エバは總ての人の母である。母、エバの〔後胤〕は總ての人である
 と考へる。

以上の理由よりして「女の胤」『かれ』をメシアと考へ、この箇所をメシアの豫言
 と解するの Prof. Böhl 説には従ひ得ぬ。

これを「メシアの豫言」と解する今一人は Prof. Döllner である。

第三 Prof. Döllner (Oriental. Prof. an d. Univ. zu Wien) は創「Ⅱ」をキリスト並に
 マリアの豫言とする。⁽¹⁾

氏も亦、蛇をサタンなりとする。理由に曰く。

こゝに所謂「蛇」はサタンである。何んとなれば「サタンの嫉みよりし
 て死が此の世に生じた」からである。黙示録一二、二〇にもサタ
 ンを老いたる蛇と云つて居る。⁽²⁾と。

蛇を以てサタンなりと見る説に關する余の批評は、已に Prof. Böhl に對する
 批評に於て述べた。⁽³⁾サタンの信仰はザカルヤ以後のことである。それ以前に
 サタンの信仰はない。然るに、ザカルヤより三百五十年も前のヤグイストのこ
 の言——この言のうちの蛇をサタンと解釋しやうと云ふのは時代錯誤も甚だ
 しい。原意を強ゆるの甚だしいものである。

Weisheit Salomonis も黙示録も共にヤグイストより七八百年もあとの文書(及び
 思想)ではないか、それを以てヤグイストを解せんとするのは學的研究者のと
 らぬ所である。なほ Prof. Döllner は説いて曰ふ。⁽³⁾

(1). Joh. Döllner: Die Messiaserwartung im A. T. Wien 1911. S. 7-11.
 (2). 同書8頁
 (3). 同書8頁

第二論點
「蛇はサタ
ンなりとの
由一つの理

「人を誘うた蛇、人が戦ふ蛇、神の詛ひに値へする蛇は正に „vernünftiges Wesen” (理智を性とするもの)ならざる可からず。單に、あの生物の蛇 *naturl. Schlange* であつたならば罰せらるるに値へしないではないか。罰せられた蛇は *ein vernünftiges Wesen* (理智を性とするもの)であらねばならぬ。自然の蛇でなくてサタンでなくてはならぬ」と。

人と他の動物とを同列において見るのは未進化的な人間の心理である。

舊くイスラエル人は動物 *naturl. Tiere* を罰する(人を罰するのではなく)法律を作つて居る。言ふまでもなく、法は、その動物を人以上の力と見、それぞれをサタンと見て罰して居るのでない、*naturliche Tiere* として罰して居るのである。人と動物とを同列に見る未進化的な人の心が、その法律を作り、この神話を造つたのである。

余は唱へたい。反つて、蛇を、*naturliche Tiere* として罰したことはヤヱイストにもあり得る(それには例證も充分であり、心理的にも可能である)が蛇を *„vernünftiges Wesen”* として罰することはヤヱイストには未だあり得ない(それはザ

(1). 出. 21, 28, 29. 誓約令

批評

第三論點
「女」はエ
バをさす
「女」は聖母
マリアをさ
し「女の胤」
はキリスト
をさすとの
Prof. Doller
の第一理
由

カルヤ以後に於て初めて考へ得」と。

Prof. Doller は曰ふ。「女」はエバを指さない「女」は聖母マリアをさす。従つて「女の胤」はメシア、キリストを指すと。理由とするところはかうである。先づ「女」はエバを指さぬ理をあげて

カトリックの註釋家は、大概「女」をエバと解し「女の胤」を善良なる人間(そのうちにメシアをも含めて)と解釋する。然し、この解釋は到底、正鵠を得難い。何んとなれば、神のいましめを犯したエバはサタンの友であり、サタンの敵でないから。(1)と。

エバは蛇の誘ひに親しく應じ、誘はれて蛇と親しかつたのだ、夫故、エバは蛇の友であるとも蛇の敵ではあり得ない。従つて「蛇と敵同士だ(拙譯参照)と云ふことばに於ける「女」は「エバ」で有り得ない。蛇の敵たる女はマリアの外ないと云ふのが Doller の説である。Prof. Doller が「女」を解してマリアなりとする理由の第一である。

然し、Doller の解するところは原意に反する。成程エバと蛇とは親しかつた

(1). 同書 10 頁

批評

エバは確に蛇の *Freundin* であつた。夫故これから先きは御前達を敵同士にしてしまふ(試譯参照)女を蛇の敵にしてしまふと云ふのである。そしてエバを蛇の誘惑から安全にしようと思ふのがこの原意である(丁度バベルの塔の物語に於て、初め皆が一つことばであつた。夫故、相親んでバベルの塔の誘惑にあつた。だから今後は皆が一つことばで親みあはぬやう親みあつて誘惑にかゝらぬ様、ことばを亂してしまはうと云ふ)バベルの塔の物語と規を同じうする。「女は蛇の友であつた。夫故蛇に誘はれたつた。夫故今後は「女」をして蛇の敵たらしめやうと云ふのがこの原意である。Prof. Döllner の云ふ如く「女は徹頭徹尾蛇の友たると云ふのでもなければ終始一貫蛇の敵たると云ふのでもない。蛇の友たりし「女」が蛇の敵となつた生殺を物語つたのがこの神話的傳説の主題なのである。このテーマを捉へにがして Prof. Döllner は全然この物語に無理解である。たゞ女を解してマリアたらしめんとし「女の胤」を解してキリストたらしめんとした結果はかくも物語からテーマを逸せしめ、理解を盲目たらしめたのである。虚心物語に對する時「女」がエバである事は餘りに明白である。尙ほ

(1). 創. 11, 1-9

(その第二理由)

Prof. Döllner は「女」を解してエバならずとする理由の二としてあげて居るのは、エバは蛇に勝つて居ないからと云ふにある。

「物語に於て何もエバ、または、エバの胤が蛇に(サタンに)勝つたなぞとは云はれて居らぬ」と

然し「蛇に勝つぞ」と云はれて居るものは「かれ」(ヘブライ語 *מימי*) (男性)であつて女性でない。胤(ヘブライ語 *Namim*)と云ふ男性の字をうけて「かれ」(*מימי*)と云つて居るだけである。ラテン譯(*Vulgata*)は(故意に?) *ipsa* と譯して居る。そしてマリアの豫言として居る。

原語は然し *hwti* 即ち *ipse* であつて *ipsa* (*hi*) ではない。それは男性の名詞 *Nara* 「胤」(女の後胤)をうけて居る。原文は「女」の後胤が蛇の頭を砕くと云つて居るに過ぎぬ。「女が蛇の頭を砕く」とは云つて居らぬ。Prof. Döllner が *„Eva mit seinem Samen“* が蛇にかつ (*in sieghafter Feindschaft stehen*) と解したのは原意の誤解である。それは原文に反し、原語に反して居る。

「女が蛇の頭を砕く」と云ふ風に原意をとりちがへた Prof. Döllner は「蛇の頭を砕

(第三理由)

批評

(1). 同書. 10頁

く女は *das Weib der Esögyja* (女性それ自身)ではないそれは *die unbefleckte Jungfrau Maria* (穢れなき處女マリア)であらねばならぬと云つて居る。(1) そして *factus ex muliere* (女のする)は「悪魔のわざを毀たんがため」(ヨハネ一書三)世に現れたキリストであると云つて居る。(2)

批評

『女』は女性一般と解すべきでない——何となれば、サタンと女性との間の確執は彼れと男性との間より僅かであるから。『女』は特別な女性——神の特別な御指圖によつてサタンと闘ひ……(中略)……而も常にこれに勝つて罪なく穢れなき處女マリアであらねばならぬ。(3) と。それは巧みに連鎖されて居る。然し、人の子を縛つた連鎖は、人の子を段々と土底の暗黒に搬びおろした。土底の暗黒からは、常人の目には見えぬキリストの星が見えるのかも知れない。然し何人の前にもあらはな舊約の原文は、誘はれた「女」エバをのみ餘りにあらはに曝露して居る。余としては罪の母エバを以て *„unbefleckte Jungfrau“* を *beflecken* するに忍びないのである。

(1). 同書. 10頁
(2). 同書. 11頁
(3). 同書. 11頁

余はマリアをエバと離さねばならぬ。(聖母の聖を保たしめよ!) (勿論エバの胤はキリストを意味せない。)

第四 Prof. Ch. A. Briggs (Professor at the Union Theological Seminary, N. Y.) も創「二」エバを以てキリストの豫言だとする一人である。(1) 氏が理由とするところは左の如くである。氏は「蛇の胤」と「女の胤」とに獨特な解釋を附して、そして氏のメシア豫言説にまで説き及んで居る。曰く。

“The seed of the serpent embraces all the evil race derived from him. The prediction points not merely to the whole family of snakes, but to the serpents of the higher world, the evil spirits, and to the serpents among mankind, the evil men and seducers, called by Jesus the children of the devil,……There are those who by birthright belong to the seed of the woman, who become by apostasy the children of the serpent. (ibid P. 75)

(2). Ch. A. Briggs: Messianic Prophecy N. Y. 1886 p. 71-77

“Her seed is the entire race of her descendants. But inasmuch as the serpent is represented as bruising the heel of the man……it seems to be necessary to think of the seed of the woman as culminating in an individual victor, who is the champion of his race and gain the final victory over the serpent”——ibid 75f.

即ち氏は、蛇の後胤は人の子のうちにもある。The evil men はそれである。キリストによつて“The children of the devil”と云はれたものがそれである。夫故、人の子として生れたものうちにも蛇の後胤の墮落したものはいくらでも居る。墮落しない人の子はメシア、キリストだけ。故に「女の胤遂に蛇の胤を服す」と語つた創三ノ二四・二五は正にメシア、キリストの豫言をなしたものであると云ふのが氏の説である。

Prof. Briggs の學説の出發點は、蛇を以てサタンと見る點にあると思ふ。

批評

蛇はサタン、夫故「蛇のする」は“The children of the devil”と云ふので丁度キリストが⁽¹⁾the children of the devilと云うたことがある。それはthe evil men, the seducersを意味する、また「女のする」と生れたもので蛇の後胤と墮落したものを意味すると Prof. Briggs は解して居る。

ところがthe evil menと云ふのは明かに人のうちなる特殊な罪びとである。反之、「女のする」と生れたもので蛇の後胤と墮落したものはそれは何れの人でもあり、總ての人でもある。全人類である。

Prof. Briggs の「蛇のする」の釋義には矛盾がありはしまいか。少くも Prof. Briggs は互に矛盾した兩解釋の間に動搖して居ると思ふ。

若し Prof. Briggs が「蛇の後胤」を人のうちその一部のthe evil men——キリストの所謂the children of the devilと解せんとすればそれはキリストの考へをそれより、八五〇年も前のヤヴイストに強いようとするものである。それは時代錯誤である。

若し Prof. Briggs が「蛇の後胤」を解して「女の後胤と生れたもので蛇の後胤と墮

(1). ヨハネ. 8, 44.

落したものであるとするならば、それは人類全部のことである。(人類全部は「メシア」の流に新約式に、云ふならば、義人なき人の世であり、禁せられた木の果を食つた罪の母の子である)さて、然し人類全部を「蛇のすゑ」と解する時は、それは第一、餘り明かにヤヱイスト自身の意とちがふ。ヤヱイストは人類全部を「女のすゑ」と聲明して居るからである。(1)

又、人類全部——ヤヱイストの所謂「女(エバ)のすゑ」——を「蛇のすゑ」と解する時は、この世は「蛇のすゑ」ばかりになつてしまつて「女のすゑ」がなくなる、さうなるとこの物語は、成立しなくなる。物語は「女のすゑ」と「蛇のすゑ(女と蛇)との争ひを物語つたものである。世が「蛇のすゑ」ばかりになつてしまつたら、いくら粹惡な「蛇」のすゑでも相手のない角力はとれぬ、敵のない争ひは出来ぬ。争ひの物語は自然消滅せねばならぬ。Prof. Briggsは「蛇のすゑ」を撓めて物語を殺したものである。

但し、Prof. Briggsとても全人類を「蛇のすゑ」とのみ解してそこに少しも「女のすゑ」を残し考へないわけではない。「蛇のすゑ」の敵手即ち「女のすゑ」もかすかに残

(1). 創. 3, 20.
(2). 創. 3, 20.

されては居る。

が「女のすゑ」に關する Prof. Briggsの所説は頗る動搖して居る。一方 Prof. Briggsは「蛇のすゑ」を全人類と解して、——「女のすゑ」をキリストだけと解せんとして居る。——然し、ヤヱイストは「女のすゑ」を以て全人類として居る。「女のすゑ」を唯一人、殊に、メシア、キリスト唯一人などとはヤヱイストの思ひもよらぬところである。他方 Prof. Briggsは「蛇のすゑ」を以て the evil men と解し「女のすゑ」を以て the good men (キリストをも含めた)と解せんとして居る。「女のすゑ」を人類の一部に限ることはヤヱイストの原意に反する。(また「蛇のすゑ」を the children of the devil 即ち the evil men と見るところに、キリストを以てヤヱイストを強ゆる時代錯誤がある。)

要するに、余は「蛇のすゑ」を、一部の罪びと、又は、罪びとなる全人類と見、「女のすゑ」を一部の善人、又は、至善のメシアと見んとする Prof. Briggsの説に従ふことが出来ぬ。それはあまり物語自身の意を顧みず、キリストのことばに従つて物語を解さうとするものであるから。

(1). 創. 3, 20.

氏は創三ノ四・二五を以て福祉の誓約とは認めて居る。⁽¹⁾ 然し、メシアの豫言とは見ぬ。かくするものを駁撃して曰く。

『女の胤』に箇人格を認めんとし『蛇の裔』にサタンの精神的未裔を認めんとする等は原意を強いるの甚だしいものである。

更に、また、蛇に對する神の宣言について考察をめぐらす時『女の胤』は斷じて人類一般であらねばならぬ。

總じて、メシアの人格は、遠祖に對する神の誓約に明らかでない。従つてこゝを箇人格、メシアに當てゝ考へることは大にあやしい。そうした解釋はまた、創世記内のメシア誓約の階段的進化と適順しなくなつて來る。⁽²⁾ と。

個人と『女の胤』を解することの非なる點、全人類を意味せねばならぬと云ふ點は共に余が Prof. Briggs の學說批評に於て細論したところである。余も此說を奉ずるものである。

尙ほ、創世記内に於ける Stufengang der Mess. Verkündigung (メシア誓約の階段的

進化)てふ點は

第二 Hermann Strack (Prof. an d. Univ. z. Berlin)⁽¹⁾ もほぼ同意見である。

歴史のすゝみ行きにつれて、アブラハムの胤は、ダビデの胤となり遂に箇人格メシアに至る。と。

Prof. Strack は Prof. Hengstenberg が説いた創世記内の Stufengang d. Verheissung (メシア誓約の階段的進化)を舊約史籍中のヤヅイストのそれに敷衍したものと考へる。

なるほどアブラハム以後の福祉の増進に就いては認める。アブラハム以前についても、そこにノアへの福祉が物語られて居る。然し、エバに就いては如何であらう。

エバは「過去のメシア」とすべくヤヅイストにさへ餘りに缺けた人物であつた様に思はれる(このことはエバをノアと比較しただけでも明かであると思ふ)尙ほ舊く、Hengstenberg の説を略述したものに

(1). Hermann L. Strack: „Kurzf. Konnentar Genesis.“ Münshen 1905.² S. 14, Anm.

(1). 該書. S. 22, 23.
(2). 同書. 27頁

物語は童話の如く單純であり、御伽話の如く面白く語られたイスラエル最古の史料の傳へた物語である。蛇と云つたら蛇だけ、蛇の孫共と云つたらやはり蛇のことなのであらう。Prof. Briggsは蛇を悪魔などと解して、物語解釋の第一歩を誤つたものではなからうか。

また異つた方面から創三ノ二五をメシアの豫言と主張して居るのは

第五 Prof. Delitzsch (Weil. Prof. an d. Univ. z. Lpzg.) である。(1)

氏の研究法は近代に於て全然、獨自なものである。氏は所謂「メシア豫言」の最もよき註解はその豫言の成就された事實にあるとして居るのである。

氏は、この創三ノ二五に付いても(2)

誓はれたのは人類一般である『かれ』は女の影を意味する。

(Heb. 『かれ』は sarar, 'izal) 『女の胤』をうける)

と述べて居る。然し「成就した事實」の方から言を加へて(3)

唯だマリアの子、キリストのみが「女の胤」である、女より出でたるものである。……女より生れはしたもの、然し、完全にサタンに勝ち得たる

(1). Franz Delitzsch: Messianische Weissagungen in geschtl. Folge Berlin 1890. S. 25-33.
 (2). 同書. 29頁
 (3). ガラタ. 4, 4.

ものとして彼れは男から出生したものではない(1)と説いて居る。

要するに、三ノ二五自身「女の胤」は一般人類をさす。然し、事實三ノ二五に値へする(寧ろ、値へした)「女の胤」はキリストのみであつたと云ふのが氏の説である。

氏は「メシア豫言」を「成就したメシア」の方から解釋するものである。氏は、それがメシアの豫言であつたと云ふことを前提して居る。そしてそれが必ず成就するものであつて、事實成就したと云ふことを前提して居る。

吾人にとつてはそれが「メシアの豫言」であり得るか否かが研究問題であるのだ。到底前提するところではない、究めんとする問題なのである。

第二節 創三ノ二四・二五はメシアの豫言ならず只

福祉の誓約のことばと解する學說

第一 Hengstenberg (Weil. Prof. an d. Univ. zu Berlin)⁽²⁾

第一部 ヤガイスト(J)のメシア思想

(1). 同書. 29, 30頁
 (2). E. V. Hengstenberg: „Christologie des A. T. und Commentar über die Messianischen Weissagung.“ Berlin 1854-56. I. Bd. S. 4-23.

氏は創三ノ四五を以て福祉の誓約とは認めて居る⁽¹⁾。然し、メシアの豫言とは見ぬ。かくするものを駁撃して曰く。

『女の胤』に箇人格を認めんとし『蛇の裔』にサタンの精神的未裔を認めんとする等は原意を強いるの甚だしいものである。

更に、また、蛇に對する神の宣言について考察をめぐらす時『女の胤』は斷じて人類一般であらねばならぬ。

總じて、メシアの人格は、遠祖に對する神の誓約に明らかでない。従つてこゝを箇人格、メシアに當てゝ考へることは大にあやしい。そうした解釋はまた、創世記内のメシア誓約の階段的進化と適順しなくなつて來る⁽²⁾と。

個人と女の胤を解することの非なる點、全人類を意味せねばならぬと云ふ點は共に余が Prof. Briggs の學說批評に於て細論したところである。余も此說を奉ずるものである。

尙ほ、創世記内に於ける Stufengang der Mess. Verkündigung (メシア誓約の階段的

進化)てふ點は

第二、Herrmann Strack (Prof. an d. Univ. z. Berlin⁽¹⁾)もほゞ同意見である。

歴史のすゝみ行きにつれて、アブラハムの胤は、ダビデの胤となり遂に箇人格メシアに至る。と。

Prof. Strack 及 Prof. Hengstenberg が説いた創世記内の Stufengang d. Verheissung (メシア誓約の階段的進化)を舊約史籍中のヤヅイストのそれに敷衍したものと考へる。

なるほどアブラハム以後の福祉の増進に就いては認める。アブラハム以前についても、そこにノアへの福祉が物語られて居る。然し、エバに就いては如何であらう。

エバは「過去のメシア」とすべくヤヅイストにさへ餘りに缺けた人物であつた様に思はれる(このことはエバをノアと比較しただけでも明かであると思ふ)尙ほ舊く、Hengstenberg の説を略述したものに

(1). Herrmann L. Strack: „Kurzgef. Konmentar Genesis.“ Münshen 1905. S. 14, Anm.

(1). 該書. S. 22, 23.
(2). 同書. 27頁

- 第三 I. I. Stähelin (Prof. an d. Univ. z. Basel) あり。(1)
- 近く平易に Hengstenberg の説を略述したものに
- 第四 Wm. Engelhardt (Religionsprofessorin München) がある。(2)
- 此等の外になほ

第三節 メシヤ豫言ならず、福祉の誓言
にも非ずと解する學說

第一 S. R. Driver (Late Prof. at the Oxford Univ.)⁽³⁾
氏は四八頁に於て曰ふ。No victory of the woman's seed is promised, but only a perpetual antagonism と云ふ。五七頁に於てもこの Protoevangelium の一般論を試みて居るが
兩方に氏の立論の理由が見えぬ。恨みである。
余には一五節は争闘の外、尙ほ女の胤の勝利が云はれて居る様にしか見えぬ
女のするは蛇の頭を砕くと云ふのだから女の方が捷つにきまつて居る

Driver 氏の説は解し得ぬ。

然し、恰も自明であるかの如く Driver 氏の説を祖述して居るのは左の三氏である。

- 第二 Ryle (Dean of Westminster.)⁽¹⁾
及び
- 第三 Barnett (Prof. of New. College London).⁽²⁾
- 第四 John Skinner (Princidal and Professor of the O. T. Language and Literature, Westminster College, Cambridge).⁽³⁾

"No victory is promised to either party."
と。

「悪」と云ふことを在來の批評は重大視しすぎて居る様に思はれる。

第一、ヤグイストは善惡倫理觀念にそれほど敏感なものではない。(詳細は此處に略す)

第二、善惡を知るの樹と、*da'ath tobh w'ra'* を譯してしきりに「善」「惡」と云ふ文

(1). The Cambridge Bible—The Book of Genesis with Introd. and Notes by Herbert E. Ryle 1914. "There is no prediction of Personal victor or even of an ultimate victory." P. 54. (Doch vgl. P. 55!)

(2). The Century Bible—Genesis London (?) P. 109, f.

(3). The International Critical Commentary—Genesis, N. Y. 1910. P. 81, f.

(1). I. I. Stähelin: "Die Messianischen Weissagungen d. A.T." Berl. 1847 S. 17—19.

(2). Wm. Engelhardt: "Vorbereitung und Erfüllung" Erlangen u. Lpzg. 1906. S. 7.—140

(3). "The Book of Genesis" 1904. 3. (Westminster Commentaries).

字に拘泥し、尙ほ、これに後代の教義學的の意味をも付して色々倫理的宗義の六ヶ敷い理論をつけて居るのが在來の解釋である。然し、*Tobit* *Wahr* は「よしあしごとと總て」よかれあしかれ總て「何と云はず一切」と云ふヘブライ語の熟語であつて、倫理的の「善」「惡」よりはむしろ都合のよしあし、どんな事でも總てと云ふだけの語である。……謬つた譯から誘はれて此物語を原意以上に倫理的に解する通弊がある。*Skinner* 氏を蛇を an evil creature とする。ヤヅイストが蛇をわるものと考へたか甚だ疑はしい。たゞそれを害獸と考へただけではなからうか。

尙ほこの創三ノ二〇五をメシアの豫言とも見ず、福祉の誓言とも見ぬものに舊く

第五 Ferdinand Hitzig (Prof. an d. Univ. Zu Heidelberg) があるその著に

ヘブライ詩人のこの歌は人類が(經驗によつて初めて與へられた)毒蛇に對する憎惡の念に抑もの由來をもつて居る。(中略)そして蛇は

人を憎んで人を誘ひ、誘はれた人類(女と)女の胤とは、誘はれた不幸の身に蛇(蛇の胤)を憎惡するに至つたと物語つて居るのである。(1)

要するに蛇と人とのにくみあひが此の物語のテーマであると説く。むしろ人が蛇をにくむにくしみがこの物語をなすに至つたのであると——かゝる物語が發生する心理的觀察をも詳にして居る、*Hitzig* の解釋は是も舊くして最も新しい神話解釋法である。一八八〇年に遺著として遺されたこの一書に潜む *Hitzig* 氏の天才的洞察には多大の敬意を表する。

尙ほ蛇をサタンと見、女の胤をメシア、キリストと見る説に反對して左の如く云つて居る。云ふところ一々正鵠を得たものと考へる。

後代のユダヤ人の見解に立脚して、多くの基督教義學者は此處に「第一福音」(*Protoevangelium*)を見出さんとして居る。即ち『女の胤』をメシアと解し『蛇』をサタンと解せんとして居る。然し、原文に其意極めて不明瞭である。原文三ノ二〇は、エバを以て、總て生けるものの母と

(1). 同書 百四十二、三頁

(1). Vorlesungen üb. d. Bibl. Theol. u. Mess. Weissagungen d. a. T. Karlsruhe 1880. S. 140—45

して居る。若し、また『蛇』がサタンであるならば『蛇の胤』は何であらう。『たね』Nara' とは『後胤』の意である。サタンの後胤と云ふことは然し、耳にしたことがない。——一體サタンの女房なぞと云ふことも、きいた事がないのであるから。

Nara' が箇々の後胤を意味する場合もある。(1) 然しこゝでは集合名でなくてはならぬ。一般人類の意であらねばならぬ。一個人の意味であり得ぬ。——一個人だけがエバの後胤ではあり得ぬから。もし、それが(メシアの如き)一個人を意味する場合であつたならば當然後胤の一人と表現されて居ねばならぬ。……普通『女の胤』をキリスト、『蛇』をサタンと『解』せんとする。(中略)然し、その爲めには、むしろ、『頭』と云ふと『踵』と云ふとが反對になつて居らねばならぬ。以上の理由からして、原著者は普通の蛇と、蛇に對する人類の憎惡の念より外、何事も意味したのではあり得ない。

Hitzig の此の説を下に繼承したものに近い頃

第六 E. Hahn (Pfarrer in Heilingen bei Orlamünde) の著 "Die Messianischen Weissagungen."

Freiburg i. B. 1899 (S. 134-136.) がある。

Hahn 氏は Hitzig 氏の結論だけを傳統して居る。然し、立論は Hitzig 氏のそれと異なる。而もそれは誤謬である。それ故折角の Hitzig 氏の結論までも傷けて居る。Hitzig 氏のために惜しむ。

Hahn 氏は「碎く」と云ふ原語 swp (碎く) を sp (ねらふ) と通ずと解して居る。そして一五を女の胤は蛇の頭をねらひ、蛇は人の踵をねらふと譯し、ねらひ會ふ事は何れの勝利をも意味して居らぬ。夫故一五是メシア豫言でもなければ福祉の誓言でもないと云ふ。

然し、swp は swp であつて sp でない。「碎く」であつて「にらむ」でない。——此點に就いては Franz Delitzsch が註解學 Exegese に不動、不朽の眞理を提供して居る。

尙ほ、

(1) 該書二十八、九頁

(1) 創. 1, 25. 等
(2) 創. 3, 15.

第七、Holzinger(Z. N. Stadtpfarrer in Münsingen).

第八、Kantusch (Prof. a. d. Univ. zu Halle)

が Hiltz 氏の結論を傳承して居ると考へる。

第四節 余の見解

以上に近代の碩學十七家の説をあげた。そして、それは、英米、獨に於て最近四十年間に公にされたメシア豫言の研究の全部である。

が。然し、——余を以て見るに——此等は、なほ、一つを缺く。それは此等が、一つ残らず、皆、一齊に、問題の創、三ノ二四、二五を以て創、三ノ二四、二五を解せんとするにある。

創、三ノ二四、二五が屬する史料ヤヅイスト一般のメシア思想乃至福祉思想からこの三ノ二四、二五を見んとせざることである。

研究上の方法論
一切の來諸誤

イスラエル宗教文化史一般の進み行きの上からこの創、三ノ二四、二五を眺めんと試みないことである。

たゞこの箇所⁽¹⁾を以て此の箇所を解せんとするにある。

たゞ此の箇所のみによつて解するとき、此に所謂「蛇」は單なる蛇とも解し得ればサタンとも解し得やう。此所のみによる時「女」をエバともマリアとさへも解釋づけ得よう。「女の胤」を人間總てとも、メシア(キリスト)なりとも解釋づけ得よう。

大史料ヤヅイストのうちからの僅か二節は、内容が貧弱すぎる。強いて極言すればそれは始んど白紙同様である。その上にメシアを描かうと、マリアを畫かうと、裸體のエバを寫さうとそれは勝手である。但し、それは新に描く畫像であつて、已に畫かれて居た畫像そのものではない。

已に畫かれてそこに存したもとの畫像は、ヤヅイスト全部を一つのキャンパスとした一つの繪畫である。それは寸斷を容さない。剔出を拒む。

然るに今ヤヅイストのうちから唯だ僅かに二節のみをもぎ取り、剔り出して

(1). 創. 3. 11. 15.

(1). Kurzer Handl. Rommenter z. a. T. herausgegeben von Karl Marti Freiburg 18.88 Band 1. S. 35.
(2). D. Heilige Schrift A. T. Tübingen Band 7. S. 10. s.

これを論じて居るのが在來諸説一切である。誤つて居る。初め二節を剔出した其心はキリストの悌を舊約の何所にか探し當てんと求めた心が、さう解釋づけられさうも解釋づけられる二片だけを見出して、それだけを剔出してキリスト、メシアの豫言と有難がる心である。それは(ヤグイスト全部のうちから僅か二節を剔り出すと云ふことは)例へば美しく整つた古美術の神聖を瀆して名畫を寸断し、僅かにその断片二個を得て肌の守りと難有がることである。畫心なきものの聖き悪戯である。

これに反對するものも、然し、やはり二節だけを把持して、二節中にはメシアのすがた無しと論断して史料全部は更に顧みない。二節だけを剔り出した者の説に反對して居る。然し、二節だけを剔り出した事、其事には反對して居らぬ。等しく畫心なきものである。それは畫心なきものの聖き詮議である。

繪は云ふまでもなくカンバス一面に擴つて居る。カンバス一面を必要とする。断片は繪具であつて、繪ではない。

ヤグイスト中の二断片を把へて、ヤグイストのメシア畫像を云々するものは正に繪具を論じて繪を論じ得たりとするものである。

然るに近時、四十年このかたの十七碩學は悉く二断片を把へ、その二断片によつてメシア畫像を云々するものである。云は、繪具を論じて繪を論じ得たりとなすものである。繪心なきものの論議である。

吾人は近時の總ての碩學に反しても、繪、それ自身を尊重せねばならぬ。二断片を餘所にして先づ史料全部に擴がる畫像全體に對せねばならぬ。

断片に寸断して畫像を殺すことなしに、そのまゝな全部に對して、畫像の命に觸れて見たい。畫像の心を心としたい望みである。

これが余の新しい試みであり、最善を盡しての努力である。心の切なる望みである。

かくと望んで求めた我心に、感得したのはヤグイストの「過去のメシア」であつた。(これに就いては、已に第一章、第二章に於て詳かにした。) 即ち、ヤグイストは

全ヤグイストが描いてメシアの畫像として居る過去のメシア

民の過去を福祉の過去と物語り、過去の優れた人物を福祉の優れた「過去のメシア」と物語り傳へたものである。そしてヤヅイストが「過去のメシア」と魂打込んで書いた畫像は人祖(ノア)であり民祖アブラハム、イサク、ヤコブであり、勇士、士師等である。夫等は何れも過去の優れた人物なるが故に福祉[二]の優れたメシア Heiland とあがめられたものである。

夫等の人傑に比べると、誘はれたエバは到底、福祉、優れた過去のメシアとあがめらるべき人傑でない。そのすゑから將來、キリストが生れ出ると誓約さるるほど福祉を豊かにうけた「過去のメシア」とは考へられぬ。

總じてヤヅイストは、將來、メシア時代を齎すべき「過去のメシア」を語つては居るが、「將來のメシア」自身を語つては居らぬ。將來メシアの豫言はヤヅイストには無い。

それが「將來のメシア」を意味するか否か一更定かでない創三[一]を「將來のメシア」の豫言なりと解するほどそれほど確たる「將來のメシア」期俟はヤヅイストの中に見出し得ぬ。

全ヤヅイストから眺めた創三[一]の物語のエバ

物語の「蛇」のすゑ

一體、創三[一]に描かれて存する「蛇」は蛇であつてサタンではあり得ない、又「蛇」のすゑも蛇であつてサタンでない、と云ふ事は断片兩節を離れてイスラエル宗教文化を觀すればすぐわかる。サタンは捕囚後のザカルヤに於てさへ現はれたてであつてまだそれは悪魔として確立して居ない⁽¹⁾。捕囚より約三百五十年も前のヤヅイストにサタンの考へはあり得ない。

蛇は natürl. Schlange (普通の蛇)である。それは人の如く物云ふ。が然し、物云ふからとて natürl. Schlange (普通の蛇)以上の vernünftiges Wesen (理智のもの) = Sat. 三が意味されて居ると云ふのは誤りである。第一、それは、傳説神話であるところからして蛇も物云ふのである。猿蟹合戦の猿がサタンでなくとも物云ふ様に。第二、蛇に物云はせた民衆心理は單に人と獸との Gleichsetzung (同格視)を示す。 Vernünftiges Wesen = Satan を考へる心理のみが蛇に物云はす民衆心理でない。

物語の「女」のすゑ

物語の蛇(及び蛇のすゑ)は單に蛇である。
物語の女はエバ。ヤヅイストが考へるエバのすゑは總ての箇々の人間であ

(1). 上記六三、六四頁参照

物語のこ

る。と云ふことは同じヤウイストの同じ筆、創三^{三〇}が證する。(何もキリストなぞを意味しては居らぬ)

物語は人と蛇との物語にすぎぬ。人が蛇をきらふ心を題材とした傳説にすぎぬ。

物語はメシア、キリストの豫言でもなければ、聖母マリアの豫言でもない。

さうとするのは第一、^{二〇五}兩節だけを無理無體に剔出し、その前後の聯絡を斷たせたらうへ第二、蛇をサタンと解釋づけ、第三、蛇の頭を碎く「女のすゑ」は、サタンを碎くメシアのことであると解釋づけたのである。

然し、ヤウイストはサタンを知らぬ。ヤウイストの蛇はサタンたり得ぬ、

ヤウイストの謂ふ「女(エバ)のすゑ」は總てのあらゆる人間である。創三^{三〇}(^一)に明記がある。それをメシアと云ふ唯一の人の子の限らうなぞとはヤウイストの物語全體に全然理解をもたぬものの誤つた解説である。乃至は、二節だけとり放つて、前後の聯絡を眩ませた上、これをメシアの意に強解した信仰的惡戯である。

吾人はこれを採らぬ。

要するに物語は人と蛇との物語にすぎぬ。人が蛇をきらふ心をテーマとした傳説にすぎぬ。

但し、傳説はヤウイストによつて宗教的に而も一神教的に脚色されて居る。

かうした物語までをも一神教的に脚色したそこに吾人はヤウイスの宗教文化史上の充分な價值(進化)を認めるのである。

第二 創八^{二〇}—^{二三}

“Messianic prophecy”の一として Briggs は創八^{二〇}—^{二三}をあげて居る。⁽¹⁾ 先づ、試譯を記すこととする。

創八^{二〇}—^{二三}は左の一文に譯し得ようか……

そこでノアはヤウエのために祭壇を築いた。そして淨い家畜淨

第一部 ヤウイスト(J)のメシア思想

九五

(1). Briggs: ibid P. 78. f.

い鳥をとつて焼贄(燔祭)としてその祭壇にささげた。
 ヤーウエはそのかぐはしい香をかぎ給ひ、獨語ち給うには「人 (En'ani
 am) ゆゑに、地 (ha'adamah) を誼ふことは、もう、しまい。——どうせ人 (ha'
 adam) と云ふものは、若いうちから、悪いことしか、心に念ひはしない
 のだもの。自分で創つておいた生物を、自分で打殺すことなどは、も
 う、念ひ断たう。

二二地の存する限り

たねまきかりいれ

さむさ あつさ

夏 冬

ひる よる

めぐり めぐる

時をたがへず

これを「メ
 シア」の
 唯一の
 人間的
 學說と
 するに
 對する
 批評

將來のメ
 シア的
 豫言の
 過去に
 對する
 批評

これは然し「將來のメシア」の出現を豫言した所謂「メシア豫言」とは如何にする
 も解し得ないのである。先きに挙げた先學 Franz Delitzsch, Thomson, Böhl, Deller,
 Hengstenberg, Strack, Stähelin, Driver, Kyle, Barnett, Skinner, Hitzig, Hahn, Kautzsch, Holzinger
 悉くこれを「メシア豫言」としてあけて居らぬ。

また J. Wellhausen⁽¹⁾ も E. Sellin⁽²⁾ も P. U. Volz⁽³⁾ もこれを「メシア豫言」として挙げ
 て居らぬ

これを「將來のメシアの豫言」として挙げたのは Briggs の大なる誤謬である。
 八ノ一三のところに一體「將來のメシア」が潜んで居るのであるか。Briggs 自身もこ
 れを求め得ず、「Though not strictly a Messianic Promise」と漠然、表現して居る。「將來の
 メシア」を説いた所謂 messianic prophecy の一として創八ノ一三を引用したのは Briggs
 の誤である。そこに「將來のメシア」は居らぬ。

が、そこに、余の所謂過去のメシアは居る。それはノアである。

(1). D. Comps. d. Hx, Berl. 1885.
 (2). Isr. jüd. Heilandserwartung Berl. 1909.
 (3). "Messianische Weissagungen, aus dem massoretischen u. Vulgata-Texte für akademische Uebungen zus. gestellt." Trier 1911.

優れた過去の人物、ノアは、ヤヴイストによつて、優れた福祉の人物を描き出されて、正に「過去のメシア」となつて居る。ヤーウエの祭壇に馨はしい香をたいたノアには、洪水の咎禍再び来るなきこと約され、豊年の福祉が誓はれて居るのである。

ノアはかゝる誓約を受くほど、福祉豊かなる「過去のメシア」であつたと物語られて居るのである。

單なる洪水神話の人物ノアを福祉物語に於ける「過去のメシア」と脚色したところ、ヤヴイストの切なる福祉欲が現はれ、イスラエル宗教とバビロニア宗教との相違が明かである。

バビロニア神話に於ては、洪水の後、神に供物を献げた「*Enkidu*」(バビロニアのノア)の献物は神々に馨はしい香を送り

神々は 香ひをば かぎ給うた

神々は かぐはしき香をば かぎ給うた

神々は 寄りたかり集まつた

バビロニア神話の対
比はヤコブ型
の利福思想
のメシア
と「過去のメシア」
の福祉思想

—— さゝげもののまわりに、

—— 小蠅の様に

馨はしき香を嘉した神々に *Enkidu* は告げて曰ふ。

これまでは *Enkidu* は人間のたぐひであつた。

然し、これからは、*Enkidu* とその妻は

我等、神々の様、うやまはれるにちがひない⁽¹⁾

と。

バビロニアのノアはヤコブ型の利福思想を成就して、自ら神となつて居る。

イスラエルのウトナビイシユテイ(ノア)は福祉優れた「過去のメシア」となつて居る。

居る。

バビロニアの利福思想の洪水神話を、イスラエルの福祉思想の洪水神話にかへ——神々の物語を一神ヤーウエの物語とし——神になつたと云ふ物語の *Haro* を「過去のメシア」と脚色しかへたところにヤヴイストの福祉思想が出て居

(1). H. Winckler: Keilschriftl. Textb. Z. A. T. Lpzg. 1903. S. 91.
(2). Winckler: 同書 S. 93.

る。

かくて創八ノ二〇―二二はヤグイストの「過去のメシア」を極めて鮮かに表はしたものである――ヤグイストの思想にありもしない「將來のメシア」を豫言しては居らないが。

創八ノ二〇―二二は、實に、ヤグイストが「過去のメシア」の第一人者ノアをあらはに表現したものであると考へる。

第三 創九ノ二五―二六

ヤグイスト中にあつてなほ「メシアの豫言」と謂はれるものに創九ノ二五、二六がある。

先づ、原文の試譯を擧げよ。

譯著

序

試譯

二五

かれ(ノア)が口ずさんだ

呪はれよ、カナアン!

――兄弟どもの 奴隸の奴隸となつてしまへ、

二六

また、かれ(ノア)云ふ

祝め、ヤーウエ!

セムの 幕屋を!

――然しカナアンは彼れの奴隸となさしめ給へ

神よ ヤベテに

廣場を 與へよ

セムの 幕屋に

彼れも 住ませよ

——然し、カナアンは彼れの奴隷となさしめ給へ

附記 以上の譯は二六節の *barûkh* (祝されよ) を *barêkh* (祝せよ) に讀み、*yalohé sem* (セムの神) を *hole sem* (セムの幕屋) と讀んで譯したのである。

創九ノ二五、二六を „Messianische Weissagung” として論じて居るものは Briggs, Hengstenberg, Delitzsch, Sellin, Hübn, 及び Deller である。(1) 而も Deller を除いて外は悉く、セム(むしろヤベテ)が特別の福祉にあづかつたこと(例へばカナアンが遂にこれに隷屬すべきこと)がこゝにのべられて居ると説くのみである。「將來のメシア」がこゝ説かれて居ると解説するものはない。Deller もく

ノアは神を呼んで特に「セムの神」と云ひ、それによつて神がセム及びセムの子孫と特に近い關係に在ることを示して居る——それは、後代に至つてセムの子孫が天啓を身に負ふ撰民となり、メシアをさへ出す國民となるべ

これを「メシア學」として批評する

きを暗示したものである。(1)

と述べて居るのみである。

誰れ一人、この箇所が「將來のメシア」の出現を豫言して居るのだと明確に聲明し得る學者はない。

然し、夫等の學者も皆、此の箇所を „Messianische Weissagung” の一と數へて居るのである。——*Mess. W.* とし云へばそれは、一體將來のメシアの出現を豫言したものであるのに。

(露骨に言説することが容さるるならば)上記の六碩學は、この箇所を「メシア豫言」の一に數へておきながら、それが「メシア豫言」であることを解説し能はぬものである。

事程、明かに、そこに「將來のメシヤ」無く、それは「メシヤ豫言」でないのである。但し、「過去のメシヤ」はある。それセムである。ヤベテである。

否、むしろ、此の箇所には、あらはに物語られて居るのは——繰返し *Kelir ora* を以て *ausdrücklich* にのべられて居る——呪はれたカナアンの咎禍である。

その物語の

(1). 同書十九頁

(1). Briggs *ibid* P. 81—83.
Hengstenberg a. a. O. S. 23.—41
Delitzsch a. a. O. S. 34. f.
Sellin a. a. O. S. 6. f.
Hübn a. a. O. S. 137. f.

Deller a. a. O. S. 18.—20.

祝福された「過去のメシア」セムの福祉よりも、遙か鮮かに、云ひ表はされてゐるのは呪はれたカナアンの咎禍である。

「カナアンは奴隷となつてしまへ」と繰返し呪はれて居る。表面に鮮かなのは呪はれたカナアンの咎禍である。

何故、カナアンを呪はるべきものとしたか。それは老いた父の衣なきを懇に被はんとした親思ふ子心のためか。(1) 否、それは單にカナアンが自國民でないからである。政治的な仇悪の感情が、宗教感情と混一に保たれて、そこに汚らしいカナアンの呪ひとなつたのである。

夫故畢竟。それは自國の福祉を希ふ心の裏にすぎぬ。そして民の福祉を希ふ心は、民の遠祖セムに表象されて居る。そして民の福祉の表象としてセムはまた「過去のメシア」たるのである。要するに、創九ノ二五、二六は「未來のメシア」を豫言したものでない。但だ「過去のメシア」セムを「過去の受詛者」カナアンに對させて説いたヤガイストである。(2)

(1). 9, 22.
(2). 第一章第四節第二項及び總説 45—51. 頁参照

第四 民祖アブラハム、イサクヤコブに關する「メシア豫言」

序

民祖の物語のうちにあつて「メシア豫言」と稱せられるものに創一二ノ一—七(殊にIII)(J)創、一八ノ一八 (Dien) 二二ノ二七、一八 (R) 二六ノ三、四 (R) 二八ノ一三、一四 (J)がある。

福祉の過去を物語つたヤガイストは咎禍著しい「過去の Anti-Messiah」としてカナアンを物語り、福祉優れた「過去のメシア」としてノア及びセムを物語つて居る様に、民祖アブラハム、イサク、ヤコブを夫々、福祉裕かなる「過去のメシア」として物語つて居る。(1)

即ち彼等民祖は、福祉優れた過去の人物として、自身神の守護を蒙り神の嚮導にあづかり子孫繁榮の福祉をうけ、後胤は濱の眞砂とふる増さんと誓はれ住ぶに豊かなる地を與へられ(5)自身福祉に與かつたのみならず、子孫、後胤、總ての民へ

(1). 上記 第1章 第2章 参照
(2). 上記 創. 12, 3. 等
(3). 上記 創. 12, 6. 等
(4). 上記 創. 28, 14. 等
(5). 上記 創. 12, 7. 等

物語の通観

の福祉をさへ豫め其身にうけておいた事程、豊かな福祉にあつたのが民祖
アブラハム、イサク、ヤコブ等⁽¹⁾「過去のメシア」であつたとヤグイストは物語つて
居るのである。

さうしたヤグイストの「過去のメシア」物語の一節が創、一二ノ三二八ノ一三、一四等
である。

試譯

創、一二ノ三ヤトウエ、アブラハムに曰ふ。

汝を 祝すものを

我れも 祝し

汝を 呪ふものを

我れも 呪ふ

汝ゆえに

地の 總ての やからは

祝みを うける

創二八ノ一三、一四(原意を明かならしめんためなるべく原語の順に原文を直譯す
る)

我れは汝の父、アブラハムの神、イサクの神、ヤトウエである。

地——汝が(今)やすむその地——を、汝に、必ず興へる。そして汝の後胤とに。

後代、結集者(R)の加筆

一四 汝の子孫は地の砂の如く(數多く)なる。西東北南にひろがる。汝ゆゑに地の
總てのやからは祝みをうける。そして汝の後胤ゆゑに。

後代結集者の附加

附註 後代結集者が附加した加筆のあとは自ら明かである。Jは民祖だけ
を福祉の人物⁽¹⁾「過去メシア」とする。Rは然し民祖の後胤自身をも「過去の
メシア」とする。

つまり、民祖、アブラハム、イサク、ヤコブは、福みを裕かにうけたものである。身
自らの福祉は勿論、子孫後胤は渾の眞砂と數増し、地の至る隅々にまで榮えひろ

物語通説か
眺められた
等の箇所此

第一部 ヤグイスト(J)のメシア思想

(1). 上記. 80. 頁参照

(1). 上記 創. 12, 2. 3, 28, 13, 14. 等参照

がる。子孫、後胤は民祖の餘慶を蒙つて榮える。地のすべての民は、民祖ゆゑに榮えたと説いたのが此等の物語の數節である。民祖を「過去メシア」と物語つたヤグイストの福祉物語である。

子孫、後胤總ての民が民祖ゆゑに榮えたと説いたヤグイストの福祉物語を民祖の子孫、後胤ゆゑに榮える(民祖ゆゑに榮ゆるは勿論)と主張擴大したのが結集者の附加擴大思想である。(1)

結集者の挿話は充分明かに以上の試譯數節に認められる。

か結集者は挿話の外尙ほ挿文をも敢てした。

それは創二二ノ二八である。

創二二ノ二八||創二六ノ四後半

汝の後胤ゆゑに地の總ての民は祝せられる

Jは民祖を福祉の人「過去メシア」と物語り、Rは、民祖の子孫自身をさへ過去メシアと見んとして居る。

但しRのの考へとしてさへそれは「過去」のメシア物語である。Rのの考へを

(1). 上記。試譯とその附註参照

此等を「メ
シア預言」と
となす學說
とその批評

以てしてさへ「後胤」は一般の子孫であつて、子孫の一人、子孫のうちでの特別一個の子孫でないことは明かである。

然るに、此等に所謂「後胤」を子孫中でも特に特別な一人即ちメシアと解し、此等の箇所を「メシアの豫言」と稱する。原文、原語原意を強うるの甚だしきものである。

「後胤」を以てメシアを意味する語なりと主張する學者に Buhl, Döllner がある。

メシアがアブラハムの裔、イサクの裔、また、ヤコブの裔である事は遠祖に宣べられた誓約のことばからして明かである。(2)

また、同じ傾にあるものに Hengstenberg, Briggs がある。(4)

此等は勿論、吾人の肯んじ得ぬところである。

以上引用した聖句は、要するに、民祖、アブラハム、イサク及びヤコブを「過去のメシア」と物語つたものである。「未來のメシア」を豫言したことばで、夫等はあり得ぬのである。

(1). Böhl: Christologie d. a. T.'s Wein 1882. S 83.-105. (Bes. 93.)
(2). Döllner: Die Messiaserwartung im A. T. Münster 1911.S. 20-23.
(3). Döllner. S. 20.
(4). Hengstenberg: a. a. O. S. 41-54.
(5). Briggs: ibid. P. 83-92. (Especc. P. 85-89)

歸 結

以上に於て吾人はヤヅイスト中に存する所謂「メシア豫言」を研究した。古來の學説を吟味しつゝ、「メシア豫言」の原文を探究した。

要するに「メシア豫言」にメシア豫言はない。……これが如上の研究の歸着である。

所謂「メシア豫言」にメシア豫言は無い。

さらばと云つて、然し、メシア的な思想——福祉思想はヤヅイストに在る。充分在る。明かにある。

それは「過去のメシア」と結晶して存する。所謂「メシア豫言」の個所なども、實は、悉く「過去のメシア」を物語る夫等である。

一體、ヤヅイストの物語、總ては、國民の過去の福祉の物語である。

民が神の民として、抑も福祉に産れ、如何に福祉に育ち來つたか神が民の神と

して如何にこれを福祉に導き如何にこれに福祉を授け來つたか——神が授けた民の福祉を物語つたものがヤヅイストの歴史物語である。神と民との自然的、必然的特殊關係を過去の歴史に物語つたものが、即ち、ヤヅイストの歴史物語である。

そして福祉の歴史を代表するものは、實に「過去のメシア」だつたのである。

第二部 エロヒストのメシア

思想研究

序

福ひを希うて、神と相撲し、神を振り伏せて、神から利福を強奪したのはヤコブであつた。ヤコブの物語にあらはれた「最古ヤヴイスト」(J*)の「ヤコブ型の利福思想」であつた。

福ひを希ふ心もて、神にひれ伏し、神から祝福されて、福祉を授けられたのは過去の国民、殊に「過去のヤシア」であつた。「過去のメシヤ」に描き出された一般ヤヴイスト(J)のメシア思想＝福祉思想であつた。

とは已に序編並びに本編第一部に審かにしたところである。さて、然し一般ヤヴイストに後るる更に一百歳にして現はれたエロヒストの幸ち希ふ心は如

何なる形をとつて現じたであらう。

究むるに、それは、大體に於て、ヤヅイストのそれと同じである。「最古ヤヅイスト」から「一般ヤヅイスト」への動向——利福から福祉へ、ヤコブから「過去のメシア」への思潮の流れは、エロヒストの心に流れ入つて一層の深さと一層の廣さとに展開して居るのである。そこには舊に倍した福祉の過去が物語られて居り、より鮮かな「過去のメシア」が描き出されて居るのである。

第一章 エロヒストの福祉物語

エロヒストも、ヤヅイストと同様、福祉の過去を物語つたものである。そこには個人の福祉も物語られ、民の福祉も語られて居り、民と個人の各禍も述べられて居る。(3)

第一節 個人の福祉

を物語つても、そこに「ヤヅイスト同様神の救拯が傳へられ、神の福みが語られ、また、神の嚮導が述べられて居る。(6)

第一項 神の救拯

神は民祖の悩みを顧みて例へばハカルの子の死せんとするを救ひ、民祖の子孫を顧み、四圍の民をしてこれを恐れしめ、禍を轉じて福となし、難のうちに向ほ且つ榮えを得さしめ、そこなふものをしてそこなはしめずと神の使をして、民か

脱苦救難

(1). 本章第1節第3項 (6). 本節第3項 出. 3, 21.
 (2). 本節第2節 (7). 本節第3項 31, 42, 35, 3. 出. 13, 19.
 (3). 本節第3節 (8). 本節第3項 21, 17, 18.
 (4). 本節第1項 (9). 本節第3項 50, 24, 25.
 (5). 本節第2項 (10). 本節第3項 35, 5.
 (11). 出. 3, 21.
 (12). 創. 31, 7, 24, 29.

ら贖ひとらし神自ら借にまして、これを守護し、異邦の敵人さへ「汝(アブラハム)何事を爲すにも神汝と借にます」と驚嘆せしめたほどであつたと物語る。神の救拯をうけた民と民の遠祖とは

第二項 神の福みに與かり財寶家畜總てを與へられて、榮えを身にしたと云ふ。尙ほ

第三項 恒に福の嚮導にあづかり夢にさへ顯はれて民祖をよしなに誘導したと物語られて居る。

神は、各個を福んで、かくも篤かつたとエロヒストは語る。が、福祉は、直接、當人の事にのみ限られなかつた。そこに子孫、一家の上の福祉も物語られて居る。

第二節 子孫一家の福

第一項 子をたまふ神は、嗣子なきを憂へしアブラハムに子を贈ひ子無きを恥ぢしラケルに子を贈うて恥を雪がせ、贈ひし子を恒に守りこれに天の甘露と

(1). 創. 48, 16. (6). 創. 45, 13. (11). 創. 30, 32.
(2). 創. 21, 20. 31. 42. (7). 創. 31, 13. 50, 24. (12). 創. 31, 5. 出. 18. 4.
(3). 創. 21, 22. (8). 創. 20, 3. (9). 創. 30, 7. 20. 22.
(4). 創. 31, 16. (10). 創. 21, 8以下

地の膏腴と、變かなる穀と、美はしき酒とを授けんと誓うたと物語られて居る。

福祉、裕かなる民祖の子等が神より受くべき福祉は、實に、世の常ならぬ特別福祉時代、メシア時代の福祉と物語られて居るのである。

第二項 福まれたる民祖に、子を贈うて豊かなる神は、また、彼等に空の星の如く濱の真砂の如く數限りなき子孫を贈ふとの誓ひを授けたと物語られて居る。かくて、子孫、一族がうくべき福みは、至上、理想の福祉として諺にまで「エフライムの如くマナセの如く」と呼ばれ、謳はるべき福みであると物語られて居る。

至上、理想の福祉時代は、即ち、メシア時代である。民祖の子孫には、民祖、即ち、過去のメシアを通じて、民祖の子孫がうくべきメシア時代の福祉が誓はれて居るのである。メシアてふ語は未だしかつた。然し、そこに事實「過去のメシア」と「過去のメシア」に誓はれた將來のメシア時代が考へられたのである。

第三節 國の福祉

(1). 創. 45, 18. 27, 28. 23.
(2). 創. 15, 5. 22, 17. 41, 49.
(3). 創. 48, 20.

第一項 福まれた民祖には福まれた子孫、後胤、一族が授けられ、又は授けられ
ると誓はれた。が、福まれた民祖にはまた、福まれた國民がそのすゑから生じ出
づると誓はれたと云ふ。即ちハガルとてもアブラハムの子なれば、これよりも
一國民生じ出で大國民たらんと誓はれ又小國これに仕うる大國民が民祖のす
ゑから出ると誓約された⁽¹⁾と物語られて居る。

第二項 新らしき榮えの國をさへ起さんとの神は、已に存した民を其の叫喚
に應じて救ひ助けアマレケ如きとは世々自ら戦ふ神であると云はれて居る⁽²⁾。

第三項 神は國民守護の神である。嘗てあり、今もあり、將來もあつて何時も
國民守護の神であると物語られて居る。

第四項 國民の守護の神は實に禍を轉じて福とし、難を救うて榮えを得さす
神であると云はれて居る。而も神は、これを成して極めて速かであると物語ら
れて居る。

第五項 かくも國民を福ひ神は、また、國民嚮導の神と考へられて居る⁽³⁾。當然
のことと思はれる。

國難からの
救ひ

國民守護

苦を福にか
うる神

國民嚮導の
神

かく自國と自國民とを導き助け救ふ神は、他國と他國民とを咎禍に陥れしむ
る神と考へられて居る。

第四節 他國民の咎禍

ヤヅイストと同じく、エロヒストも、バロの咎禍を傳へ、アビメレクの災禍を物
語り、ヨセフならぬものの神罰を記し、畢竟するに、自國は神の守護にあづかる民
であり、神は自國を救ふ神である。神と民との間には自然的、必然的關係がある
と云ふ根本見解に樂觀して居る様に見える。

が、然し、エロヒストは、ヤヅイストの様に、設令、理が非でも神が自國を救ふと云
ふことを露骨に物語の表面に傳へては居らぬ。表面だけは、義と罰とで物語を
整へて居る。バロと其國はイスラエルの民を迫害せる罪をさばかれて神罰に
あふたと物語る。尙ほバロの罪と云ふことを明かにするために、神はバロの心
を頑なにした⁽¹⁾。そこでバロは罪を犯した。バロの罪は明かである。その明か

(1). 出. 5, 21,
(2). 出. 10, 20, 27

(1). 創. 21, 13.
(2). 創. 21, 18.
(3). 創. 27, 9. 前半 9.
(4). 創. 37, 10. 出. 3, 9.
(5). 出. 14, 25.
(6). 出. 17, 16.
(7). 出. 3, 14.
(8). 出. 11, 3, 12, 36.
(9). 創. 41, 32.
(10). 創. 46, 1. 後半 48, 21.

な罪が報いられてバロは神罰をうけたとエロヒストは物語つて居る。なるほど、これで、不義と罰との関係は、物語の表面に明かになつたわけである。然し、何故神はバロの心を頑なにしたか。此點をエロヒストは答へて居らぬ。が、それは、勿論、エロヒストの根本見解たる神と民との自然的、必然的殊關係にある。

(アビメレク對サラの問題も創二〇章に物語られて居る。尙ほ、エヂプトの神罰と云ふ點に付いては創四一ノ二七、三〇出三ノ二〇一〇ノ二一―二三)

神と民との特殊關係に樂觀するところは、ヤグイストと同じである。然し、如上、ともかくにも、義と罰とを説き、まは、義による神の審判を述べるところは、エロヒストがヤグイストと異るところで、エロヒストが豫言者時代に入り、アモスホゼア等の豫言者と時を同じうするその事實を暗示するものと考へられる。

(1), 創. 20, 4. 出. 5, 21.

第二章 エロヒスト物語の授福者

「過去のメシア」

序

前章に於て審かにした様に、エロヒストは、ヤグイストと同じく、福祉欲から眺めた國民の過去を物語つた歴史物語である。過去に於て、民が、如何に篤き神の福祉に與つたかをものした信仰物語である。

そして、それは、また、ヤグイストの様に、過去に於て優れた人物を、己が福祉欲から脚色して、福祉の優れた授福者「過去のメシア」と描き出し居る。

今、下に、エロヒストによつて描かれた「過去のメシア」の畫像を審かにしたいと思ふ。

第一節 その生誕と生立ち

「過去のメシア」も出現は、過去に於てであつたが、本質は、メシアである。夫故、彼れに就いても、未來のメシアに就いての如く、そこに聖誕が物語られて居る。ヨセフを産める母ラケル⁽¹⁾は聖き處女ではなかつたが、然し、聖き石女であつたと物語られて居る⁽²⁾。また、イサクの母サラが、イサクを産めるは、已にサラが「生むことをとめられた後」で「つた」と物語られて居る⁽³⁾。又、レビ人、夫妻の間に聖く儲けられたる男子、モーセは、生後三ヶ月にして葎の箱舟に納められ、葎の河邊にすてられたのを、バロの女に救はれて、バロの宮殿にひととなつたとは固く知られた傳説である⁽⁴⁾。

第二節 その人物

已に前章に於て究め得た様に、ヤヴイストの潤色した「過去のメシア」は、福まれたるものとして完全なる福祉の理想的人物であつた。然し、個人の人格に於て極めて不完全な性格の持主であつた。

か此點は、エロヒストのメシアは著しい相違を示す。

モーセに就いてだけは、彼れが殺人犯者だつたことを傳へては居るが、他は悉く整つた人格を有した「過去のメシア」として物語られて居る。

即ち信仰の試みになうた人物としてアブラハムは物語られ、神の靈、宿るものとしてヨセフは描き出され、神の召しを蒙れるものとしてモーセは歎へられて居る⁽⁴⁾。何事をなすにも神は彼れと偕に在る⁽⁵⁾。故に、モーセはあらゆる奇蹟を行ひ、ヨセフは神によつて能く夢を解き、自らが神によつて結ばれたる夢——兄弟の主となり、日月、十一星彼れを拜すてふ夢——をも自らの生涯を以て解いた——實に彼れはエヂプトに彼れの能を示して限りなくさときものと呼ばれたと云ふ⁽⁶⁾。

知識を備へてアブナム、またモーセは豫言者とあがめられ、能を備へて、モーセはバロと其民にいと大なる者と畏れられ、ヤエブは仇も彼れを害ふを許されなかつた⁽⁷⁾と物語られて居る。

又、ヨセフの物語に表はれたルーベンは、愛子ベニヤミンを失はんとする老父

(1). 出. 2, 12. (2). 創. 22, 1, 21. (8). 創. 37, 9.
 (3). 出. 41, 38. (4). 出. 3, 4. (9). 創. 41, 40, 45, 45, 8, 9, 26.
 (5). 創. 21, 22, 31, 42. 出. 3, 12. (10). 創. 41, 39.
 (6). 創. 40, 1—23, 41, 26. (11). 出. 20, 7. 出. 15, 20.
 (7). 創. 37, 7, 8. 尙. 50, 18. (12). 出. 2, 3. (13). 創. 31, 7, 24, 29.

(1). 創. 30, 22. 後半. 23.
 (2). 創. 29, 31. 参照
 (3). 創. 16, 2, 21, 6, 7.
 (4). 出. 2, 1以下. (尙ほ創. 21, 20. をも参照. 神による生立ち)

ヤコブに誓つてもしわれ彼れをつれかへらさば吾が二人の子を殺せ」と宣べた美しい人格者と描き出されて居る。⁽¹⁾
要するに、エロヒストの「過去のメシア」はヤヅイストのそれの如く福祉を齎す神の機械たるのみならず、美しい人格の持主として「過去のメシア」たるに値へする人物と描き出されて居るのである。

第三節 他を福ひするもの

福祉をうけて裕かな「過去のメシア」は自らを福ひしたのみならず、他をも福ひしたと物語られて居る。

即ち、マナセは苦しみを忘らすものと物語られ⁽²⁾ルーベンはヨセフを救うたと傳へられ⁽³⁾モーセとアロンとはエヂプトになやむ自國民を救ひ出すために⁽⁴⁾に神から民に遣はされたもの⁽⁵⁾アブラハムは、豫言者としてアビメレクのために代禱してその罪を消し、其命を死から救ひ贖つたと物語られて居る。⁽⁶⁾「過去のメ

他を救極

(1). 創. 42. 章特に37節. 10, 7. 17.
(2). 創. 41, 51.
(3). 創. 37, 22.
(4). 殊に出. 3, 10. 12.
(5). 出. 3, 13. 15. 5, 22. 23.

Fürsprecher
Der
leidende
Messias.

シア」アブラハムは正に「Fürsprecher (代禱者)の位置にある。

ヨセフは父兄弟の生命を救はんがため、自らはエヂプトの池になやみをうけつゝも遂に、父兄弟を救ひ、自らも福まれて榮えを身に致したるものと物語られて居る。⁽¹⁾ 物語られた「過去のメシア」ヨセフは、事實自らなやみを受けて他を福みと榮えに導く「Der leidende Messias (受難のメシア)である。

過去のメシアは父兄弟を福みに導くのみならず、子孫後胤をしてつひに大國民をなさすものとまでも考へられて居るのである。⁽²⁾

(1). 創. 45. 5. 7. 8. 50, 15下以
(2). 創. 27, 23. 33. 45. 7. 21, 13. 18. 46. 後半. 以下.

第三章 過去の福祉の物語としての

ヤヴイスト、エロヒスト比較

ヤヴイストも、エロヒストも、福祉欲を基調とした國民の過去の歴史物語である。兩者の間に大なる相違はない。

但し、そこに幾分の相違も存しないわけではない。百年の時差は、また、全く同じ傾向にある思想にも幾分、進展のあとを認めしむる。

其の一は、過去の自他國歴史の批判に正義の觀念が幾分、加へられ來つたことである。ヤヴイストは、理もなく自國が福まれ、榮え、理もなく他國が福みにもる *ungnade* の災禍を蒙つた事を物語つて居るに反して、エロヒストは義人、例へばアブラハムの榮えと、不義なる他國(例へばエヂプト)の神罰を物語つて居る。尤も、エロヒストとても正義の念に徹底しては居らぬ。それは神と民との自然的、必然的特殊關係を思想の基礎として居る。徹底して居らぬながらも、切りに正義を過去批判の標準とせんとするところはエロヒストがヤヴイストと異なる

第一、正義
の思想有無

ところである。エロヒストに於て初めて「神罰」と云ふものが考へられたわけであると思ふ——ヤヴイストに於ては(他國がうけた災禍は) *Ungnade* (福み洩れ)であつて未だ「神罰」でない。

ヤヴイストは神と民との間に福祉の自然的、必然的關係があると云ふことを露骨に民の過去について物語つたものである。エロヒストは神と民との間の福祉の自然的、必然的關係を義と罰とを通じて物語らんとしたものである。

第二、「過去のメシア」の人格

ヤヴイストとエロヒストとの相違の第二は、「過去のメシア」の人物に就いてである。ヤヴイストに於て「過去のメシア」は、殆んど神の福みの傀儡である。人格的に全く整はざる人物である。エロヒストの「過去のメシア」にも、かうした傾向はある。然し、そこには、ルーベンの如き人格者も描き出されて居り、アブラハムの如く他人の罪を消さんと代禱する *Fürsprecher* また、ヨセフの如く父、兄弟の命と榮えのために自ら悩む過去の *der Leidende Messias* (受難のメシア)も物語られて居る。エロヒストの「過去のメシア」は、ヤヴイストのそれよりも遙かに人格的(人物的)になつて居る。